# Mirage in Blue Ⅱ

神原　涼

## **Mirage in Blue ? -** オーディション

私は居場所を探してた
私の居場所はつま先の下の小さな空間だけ
私を包んで　抱きしめて
　　あなたの青い光の中に…

流れる音楽は「ロミオとジュリエット」バルコニーの場面。
ピリピリと肌を刺すような緊迫した空気。
みんなの目が緊張と野望でギラギラしてる。
そして、私も…。

次の公演の配役オーディション。
今回は新人にもチャンスが与えられた。
このチャンスをつかめれば、本公演の*プリマとしてデビューできる。
絶対つかんでやる、このチャンス、絶対に…！

目の前で木村さんが踊る。
本公演でソリストをやるベテラン。
ダメよ、彼女は。
彼女に合うのはドンキとかキレのある役だもの。
それに、ジュリエットの若々しさがないじゃない。

私は横目で他の連中の顔を盗み見る。
きっとみんな同じことを思ってるんだわ。
人の踊りを見て、心の中でけなすのよ。
「あの人はダメ、私の方がうまく踊れる」ってね。
きっと私のときもそうね。
思ってればいいわ、雑魚なんか相手にしない。

「次、23番、吉崎」
私はみんなにわからないように大きく息を吸って立ち上がった。

配役発表の掲示板。

『ジュリエット　：　佐藤有里　・　吉崎ミラ』

やっ…た！

Wキャストだけど、やったわ！
佐藤さんはこのバレエ団のプリマだもの、その人とWよ？
つまり同等ってことよね。
私の相手役は？

『ロミオ　：　　久留米祐二　・　中尾一樹』

中尾一樹…
私はニンマリしそうになるくちびるを噛んでごまかした。
すごい…中尾さんとなんて…！

中尾一樹、このマリ・バレエアートの総監督兼オーナーの息子。
それだけじゃない、数々の世界的新人コンクールで賞を取ってる若手実力者。
彼と組むってことは、そのパートナーの私も注目されるっていうこと。
すごいわ、こんなチャンス…！　絶対成功させてみせる！

はじめてのソロ・パートのレッスンが終わった。
もう脚が動かない。本公演の主役のレッスンはハンパじゃないってことね。
でも、ここでメゲてたらすぐに役を降ろされてしまう。ぜったい気はぬけないんだ。

更衣室に入ると、*コールドの子たちがペチャペチャおしゃべりしていた。
みんな、横目でチラッと私を見るけど、そのままままたしゃべり続ける。
いつもそう。このバレエ団付属のバレエ学校から上がってきた彼女たちは、
17歳で団員試験イッパツ合格して入った私を羨望と嫉妬の目で見ている。
“あんたはよそ者”って、そんなカンジ？　勝手にやっててよ。

私はあんたたちなんか相手にしないわ。
そうよ、19歳で本公演の主役よ。あんたたちとは違うのよ。

「あっ、バイトの時間！」
「私も、そろそろ行かないと」
みんなが立ち上がった。
「お疲れさまあ」
そらぞらしい声でそう言って私の横を通り過ぎる。
「いいわよねえ、親の金で遊んでられる人は」
誰かが聞こえよがしに言った。
「なんでも買ってもらえるんじゃない？　主役の座なんかも」
他のみんなも下卑た笑いをして更衣室を出て行った。
フン、バカみたい。貧乏人のひがみ。プラス才能のないヤツのひがみ。
そんなことばっかり言ってるから一生コールドなのよ。
だいたいやってることが小学生レベルだわ。
仲間ハズレにされることなんか慣れてる。
一人でいることも。
孤独も…。

マンションの部屋のドアを開けて、玄関にドサッと荷物置いて、
ソファに倒れこむように座った。
「疲れたあ」
声に出して言ってみるけど、誰も答えてくれない。
あたりまえよね、一人暮らしなんだもん。

ここは父親が私用に買ったマンション。
17のときから一人で住んでる。
そう、ニューヨークから帰ってきたときから…。
悪夢のニューヨーク。大嫌いな街。
べつにこの東京だって好きなわけじゃないけど。
好きな場所なんてないわ、どこにも。

コーヒーを入れて、冷蔵庫からヨーグルトを出した。
これが夕食。

バレリーナは太っちゃいけないし、それに…　食べたいものなんてない。

ニューヨークでもそうだった。
片言の英語しかしゃべれない南米系のメイドの作る料理。
油っぽくて、グッチャグチャで、ヘンな香辛料の匂いがして食べられなかった。
ママはいつもいなかった。
なんだ、日本でもニューヨークでもぜんぜん変わらないって思ったわ。
ううん、違うことがあった。
ニューヨークの空港に着くと、スティーブって男の人が私たちを待っていた。
ママを見つけると、走ってきて抱きしめて、そしてキスしたのよ。
私は何がなんだかわかんなくてボーッと見てたけど、つまり、ママの恋人だったのよね。
ようするに、ママも浮気してたのよ。
バッカみたい！　パパもママも浮気してたんじゃない！
知らなかったのは私だけ！　大笑い！

私は向こうの小学校に通わされたけど、クラスのみんなが何を言ってるのかも、
先生が何を言ってるのかもわからなかった。
家に帰ってもママはいなくて、やっぱり言葉の通じないメイドだけ。
そして…
私は少しずつ壊れていった。
朝、起きようとすると吐き気がして、身体が動かなかった。
すぐに頭痛がするようになって、夜中に意識のないまま歩き回ったり。
泣くことも笑うこともできなくなった。
急に怖くなって叫び出しそうになったり…。

ああ、いやだ、思い出すだけで具合が悪くなりそう。

スティーブが私を精神科に連れていってくれたのよね。
向こうの人って、風邪引いたみたいに気軽に精神科に行くみたい。
診断は「鬱病」。（って、ママが不機嫌そうな顔で私に言ったんだけど）
薬を処方してもらって、そのお医者さまが言ったんだって。
「好きなことがあったら、それをやらせてあげなさい」って。

ママはすぐに、ニューヨーク屈指のバレエ学校に私を入れたわ。
私を心配して…ってわけじゃないのよ、早く厄介な問題を片づけたかっただけ。
でも、私はそこで、やっと少し呼吸ができるようになった。
バレエの言葉は世界共通だから、細かいことはわからなくても、

バレエ用語と先生の手振り身振りでわかった。
私はのめり込んだ。必死にそこにしがみついた。
そこしか私の居場所がなかったから。
バレエをやっているときだけが、私が私でいられる唯一の時間だった。
何も考えなくてよかった…何も…。

そして、私は学年でも優秀な生徒の一人になっていった。
その頃には、だいぶ英語もわかるようになってたし。
このままニューヨークのバレエ団に入ってもいいなあって思い始めたけど、
問題は私が日本人だってこと。
アジア系の人たちは、いくらうまくてもなかなか主役にはなれない。
だから、日本に帰って、日本でいちばんのバレエ団に入って主役になろうと思った。
ううん、実はそれだけじゃないんだけどね。

ママとスティーブが結婚することになったの。
そのときスティーブに言われたわ。
「僕は君のママと結婚するけれど、君の父親になるつもりはないんだ」って。
いいわよ、べつに。私にはパパがいるから。

私はパパのところに行くことにした。
ママはすぐに親権をパパに渡した。

帰国した私を待っていたのは、パパの困った顔。
パパの後妻は、前妻の娘と暮らすのを嫌がってるって。
「べつにいいわよ、一人で暮らすから」
私がそう言ったら、パパはホッした顔したわ。
「そのかわり、マンション買って」
「ああ、いいよ」
パパはニコニコしてうなづいた。
「あと、バレエにかかるお金は全部出して。プロになってもお金がかかるの。
　みんなバイトしてやってるみたいだけど、私はイヤ。
　そんな時間があったらバレエをやりたいの」
無表情に言う私の言葉を、パパはニコニコして受け入れたわ。
そうよね、自分の新しい家族の邪魔者がいなくなるなら安いもんよね。

ママといたときだって一人だったし、パパのところには私の居場所なんてない。

だから…
他の甘えた連中とは違うのよ。
舞台だけが私がいれる唯一の居場所なんだから！

# パートナー

４日間の公演が終わった。

私と一樹さんがはじめて踊った次の日の新聞には、
『期待の新星現る–吉崎と中尾の日本人離れしたロミオとジュリエット』！
つまり大成功…！
その批評にはこうも書いてあった。

『卒なくこなすベテラン佐藤と久留米に対し、荒削りながら、
　吉崎・中尾ペアは若さの情熱に突っ走るロミオとジュリエットそのものだった。
　しかし、その確かな技術は彼らの若さを考えると日本のバレエ界の未来に
　希望の光を灯すものとなろう』

興奮したマリ先生が私に言ったわ。
「一樹のパートナーをあなたにしてよかったわ」
そりゃそうね、大切な秘蔵の息子のデビューですもの、失敗はゆるされない。

楽日のあとの打ち上げのとき、一樹さんが私に言った。
「これからも俺のパートナーは吉崎って決めてるからな」
「ヘタクソ！とか言ってたじゃないですか」
私は笑いながら言った。
そう、一樹さんとのレッスンは怒鳴られっぱなしだった。
「もっと感情出せよ、バカ！とも言ってたし」
一樹さんが笑った。
「それは、おまえが俺に恋しないからだろ」
「ああ、私のジュリエットが一樹さんのロミオに？」
「いや、おまえが、俺に、だ」
「え？」
一樹さんが私に顔を近づけて…そして…KISS…
舞台の上で、練習で、何回もしていたKISSとは…少し違って…
「俺の恋人になれよ」
「強引ね」
私はクスクスと笑った。
「俺とおまえは最強のパートナーになれる、世界に通じるパートナーだ」
「一樹さんはパートナーが欲しいの？　恋人が欲しいの？」
私はそう言って笑った。

「両方だ」
「欲張りね」
「ああ、俺は欲しいものは絶対に手に入れる」
一樹さんはそう言って私の肩をグイッと抱き寄せた。
彼のこの自信に満ちた強引さを、私はけっこう気に入っている。
だって実力と才能があるんだもの。
それを堂々と表す一樹さんは魅力的だと思うわ。
「おまえは今日から俺のパートナーで恋人だ、いいな？」
私は笑顔でうなづいた。

一樹さんは、私たちのことを隠そうとしなかった。
ううん、むしろ堂々と宣言したの。
「俺のパートナーはミラで、俺とミラは付き合ってる」って。
マリ先生は苦笑いしながら言ったわ。
「どうりで今回のパートナーはどうしても吉崎にしてくれって言ったわけだわ」
「え？」
「本当はね、私も他の先生もベテランの佐藤を相手役にしようと思ってたのよ、
　でも、一樹がどうしても自分の相手役は吉崎じゃなきゃダメだって」
そうだったの…！
「でも、一樹の勝ちね、パートナーを見極める目があるわ、
　あなたと一樹の踊りの相性はピッタリですもの」
私は黙って微笑んだ。
私は…　確実に居場所を手にした…！

通常のレッスンが終わって、更衣室に戻ると、
他の子たちが雑誌を広げながらペチャクチャおしゃべりしてる。
あいかわらずね。
「ねえねえ、CITYのボーカルっていいよね」
「頭軽そうじゃない」
「でも、顔がいいじゃん」
「顔ならW-BLOODよ」

バカみたいな会話。

「なにそれ？」
「知らないの？　ハーフだけのモデル事務所でね、その中でも、
　類とマークとJIN、この三人がすごいんだから」
「あっ、私も知ってる！　パリコレとかミラノとかで注目されてるんでしょ？」

そんなことばっかりに興味あるから、いつまでたってもコールドなんだわ。

「そうよ、今やヘタなタレントより人気あるんだからぁ」
私は呆れて思わずチラッと横目で彼女たちの方を見た。
一人が私と目が合った。
「吉崎さんは、他の男なんて興味ないわよねえ」
ほらほら、はじまった。
「そうよねえ、なんせ王子さまを射止めたんですものねえ」
そうよ、“王子さま”は“イジワルなお姉さん”には興味ないのよ。
「でも、一樹さんもけっこう打算的よねえ」
「そうねえ、金持ちのパトロンがついたってことだもんねえ」
ウ～ンザリ。

ドアが開いて、助手の先生が顔を出した。
「吉崎さん、マリ先生が来てくれって」
「はい」
みんなの視線を痛いほど背中に感じて部屋を出た。

マリ先生の部屋に入ると、見知らぬ男の人が座っていた。
「吉崎さん、こちらデ・ラ・アート出版の伊藤さんよ」
えっ？
「はじめまして」
デ・ラ・アート出版って…　あの有名な？
「は、はじめまして、吉崎です」
「伊藤さんがね、あなたを使いたいっておっしゃるのよ」
「えっ？」
「実はですね、吉崎さんがメインではないんですが、ぜひ相手役にと思いましてね」
「相手役って…」
私はマリ先生と桐生さんの顔を交互に見た。

「W-BLOODはご存知ですか？」
「え？　あ、あの…」
そういえば、さっき…
「いえ」
「実はW-BLOODの写真集を出すことになりましてね」
「はあ」
なあんだ、ミーハーな写真集ってことか。
「三人いるんですが、それぞれテーマを決めて撮ることになったんです。
　カルメン、これは相手役がフラメンコのリタ・ブランコ、若手ですが実力派で、
　もうひとつが道成寺、これは若手の尾上優之丞」
私は、熱心に語る目の前の男の顔を無表情に見てた。
興味ないわ、そんなの、結局刺身のツマになれってことでしょ？
しかも、あのコールドの子たちがキャーキャー騒いでるミーハーな相手の…！
「そして、吉崎さんにはジュリエットをやっていただきたいんです」
「え？」
「今回撮影を担当する写真家があなたの舞台を観て、ぜひ吉崎さんをと」
べつに写真なんか撮って欲しくて踊ったわけじゃないわ。
「桐生誠はご存知ですか？」
「えっ？」
桐生誠って…　あの有名な？
「え、ええ」
「桐生さんが、ジュリエットはぜひ吉崎さんでいきたいと強く推してきたんです」
「そ、そうですか」
す…すごい…あの桐生誠が…私を…
「そういうことで、ぜひ前向きにご一考いただきたいと思います」
そう言って出版社の人が立ち上がった。

出版社の人がマリ先生と何かしゃべって部屋を出ていった後も、
私はボーッとソファに座っていた。
「吉崎さん、どう？」
マリ先生が私の前に座った。
「え…あ…あの…」
「私としては、ぜひ受けてほしいの」
「え？　あ…は、はい」
「桐生誠が目をつけた人は必ず有名になるのよ」
「え、ええ」

「うちのバレエ団としても、あなたが脚光を浴びれば、こんないい宣伝はないわ、
　なんだかんだ言っても、バレエは狭い世界だから、世間に存在を知ってもらうには
　マスメディアを使うのがいちばん有効なのよね」
「はい」
「それに、あなたは一樹のパートナーなんだから」
マリ先生はそう言ってニッコリ笑った。
「わかりました、お受けします」
私はマリ先生にお辞儀をして部屋を出た。

「俺も賛成だな」
私の部屋のソファに寝転がりながら一樹さんが言った。
「さすが桐生誠だよ、ミラに目をつけるなんてさ」
「でも、相手がミーハー相手のモデルなのよ？」
「そんなこと関係ないさ、いや、むしろミーハー相手だから写真集も売れるだろ」
「まあ…ね」
「そしたら、おまえの顔と名前も憶えられる」
一樹さんが私の頬にキスをした。
「桐生誠に撮られたヤツはみんな一流になるんだ」
そのくちびるが首筋へと…
「俺のパートナーは一流じゃなきゃな」
「自信家ね」
私は笑って…
「そんな俺が好きだろ？」
「ええ…そうね…」
そうよ、その自信に満ちた態度が私を安心させる…
私の居場所はここにあるんだと…

私は一樹さんの腕の中に抱かれていった。

# 顔合わせ

撮影のスケジュール表が届いた。
全部で10日。
10日もかかるの？　一日で終わるのかと思ってたのに。
でも…まあ…しかたないわね。

「初日は顔合わせらしいけど、一樹にも来てほしいそうよ」
マリ先生が言った。
「スタッフや相手役の人に雰囲気をつかんでほしいから、
　ロミジュリの一場面を踊ってほしいんですって」
よかった。
一樹さんと一緒なら、ちょっと安心。
「いつか桐生誠が撮った一樹とあなたのバレエ写真集が出ればいいわね」
マリ先生はニヤッと笑って私を見た。
そうね、そうだわ！
そのためにも、今回はガマンしよう。
ううん、完璧にやってみせる！

一樹さんの車で撮影スタジオに向かった。
エレベーターに乗って６階に着くと、出版社の伊藤さんが待っていた。
「こちらです」
ニコニコしながら案内する伊藤さんについてスタジオに入った。

広くて薄暗いスタジオの中では、何人ものスタッフが天井に照明を吊り下げたり、
バックのスクリーンを下ろしたりと忙しそうに動いていた。
「桐生先生！　吉崎さんが到着しました！」
伊藤さんの声に一人の男の人が振り向いた。
あの人が桐生誠…！
短く刈りそろえた髪に、がっしりした体。
Ｔシャツにジーンズで、写真家っていうより、体育の先生ってカンジ。
「やあ、いらっしゃい」
人懐っこそうな笑顔。

なんかホッとした。

いかにも芸術家！みたいな人だったらどうしようと思ってたから。

「はじめまして、吉崎です」
挨拶する私をニコニコと見ている。
「吉崎のパートナーの中尾です」
「いやあ、舞台観ましたよ、すばらしかった」
「ありがとうございます」
自信に満ちた顔でお礼を言う一樹さん。
「吉崎さんは身長167でしたよね？」
「え？　あ、はい」
「そうか、よかった」
「ハ？」
「いや、JINの身長が186でね、なかなかその身長に合うプリマがいなくてね」
なによ、それ？　身長だけで選んだってこと？
「小さすぎたらバランス悪いし、大きいとごっつい人しかいなくてねえ」
「私くらいの身長で華奢なプリマはいっぱいいますけど」
私はムッとして言った。
「でも、JINの空気に合う人がいなかったんだ」
桐生誠は、私のつっけんどんな言い方に気を悪くした風もなく、そう言って微笑んだ。
「舞台を観たとき、これだ！と思いましたよ、JINのジュリエットはこの人だとね」
「そうですか」
私は無表情に答えた。
私は一樹さんのロミオのジュリエットよ！　ミーハーなモデルの相手じゃないわ！
「桐生先生」
伊藤さんが割って入った。
「JINがまだ着いてないんですよ、前のスケジュールが押してるらしいんです」
「そうか、それじゃお二人は先に着替えてきてくれますか？」
「はい」

前のスケジュールが押してる？
ああ、やだやだ、タレント気取りのミーハーモデル！
きっと高慢で世界は自分中心に廻ってるみたいなヤツなんだわ。
そんなヤツとやるなんて、あ〜あ。

衣装に着替えて、メイクは普通にって言われたから、少し抑えめにしたけど…
鏡に映る私の顔、ムッツリしたジュリエット。

「ミラ、笑えよ」
ロミオの衣装に着替えた一樹さんが鏡を覗き込んだ。
「だって」
私は大きくため息ついた。
「なんかミーハーの薄っぺらいヤツのために利用されてるってカンジで…」
「バカだな、利用するのはこっちだよ」
「え？」
「そいつを利用してミラの名前を売るんだ」
鏡の中の一樹さんがニヤッと笑った。
「モデルなんて寿命が短いんだぜ、そのうち消えてくさ、でも、バレエの世界はちがう、
　マーゴット・フォンティーンだってマイヤ・プリセツカヤだって、ずっと第一線で
　踊り続けたじゃないか、今は売れてるそいつを利用して、おまえが残る」
一樹さんが私の肩をギュッと抱いた。
「俺とミラは世界に通用するペアだ、そのための第一歩さ」
自信に満ちた一樹さんの顔を見ると、少しホッとした。

スタジオに戻ると、伊藤さんがスタジオの隅に置いてあるバーを指差した。
「マリ先生に用意するよう言われてましたので」
私とカズキさんはバーを使ってストレッチを始めた。
みんながチラチラとこっちを見ているのがわかる。
そうよ、私たちは華麗な舞台の裏で、こうやって汗を流してるのよ。
カメラの前に立ってニコッと笑ってればいいヤツとは違うのよ。

「JINが到着しました！」
入り口のドアが開いて、薄暗いスタジオの中に光が入ってきた。
そして、逆行の中に黒いシルエットが現れた。
スラッと背の高い黒い影、歩き方は…　モデル。やれやれ。
「おう、JIN、遅かったな」
桐生さんが笑いながら、JINとかいうモデルのそばに行った。
「すみません」
囁くような低い声。
「吉崎さん！　中尾くん！　こっち来て！」
私とカズキさんは顔を見合わせて、桐生さんの方に行った。

背の高い後姿は黒い皮のジャケットにパンツ。いかにも…ね。
「JIN、おまえの相手役の吉崎さんだ」

振り向いた顔は、その目は…
私を見るその目は…
深い青のその瞳は…

ヒ…トシ…くん…!?

見開いた青いその目は…私を見つめる…
その青い目に…今…私は…どう映って…
ううん…これは…本当に…ヒトシくん…なの…？
でも…この目は…ぜったいに…

ヒトシくんの目…！

「おいおい、どうした、二人とも見つめあって、もう役作りか？　アハハ」
桐生さんの声に、先に目を伏せたのはヒトシくん…　いえ…　JIN…
「はじめまして…　JINです」
はじめまして…？
それじゃ…　やっぱりヒトシくんじゃないの？
でも、あの目はぜったいにヒトシくんの目だった…
それに…この顔だって…あの頃の面影が…
「それじゃ、そろそろ踊ってもらいましょうか」
頭が混乱して…
「ミラ、いくぞ」
一樹さんが私の手をにぎった。
一樹さんの顔を見上げた。
黒い瞳に…私が映ってる…混乱した顔の私…
「どうした？」
そうよ…私は…今…この黒い瞳の中にいる…
一樹さんに手をにぎられたまま、私はリノリウムの貼ってあるセンターに立った。

バルコニーの場面の曲が流れる。

そうよ…　私が愛しているのは…　このロミオ…　一樹さんのロミオ…　一樹さん！
あれがヒトシくんだろうと、誰だろうと関係ないわ。
そんな遠い昔のこと…今の私には関係ない！

私はプロのバレリーナよ！
私のジュリエットは、一樹さんのロミオに恋してる！
一樹さんの踊りもノッていた。
ロミオとジュリエットはキスをする。
　　あの人は…見てるのかな…　バカみたい！
そして、ロミオとジュリエットは朝靄の中で離れていく。

一瞬の静けさのあと、スタジオ中から拍手が沸き起こった。
私と一樹さんはバレエ風のお辞儀をして、リノリウムの舞台を下りた。
「いやあ素晴らしい！」
桐生さんは拍手したまま私たちのそばに来た。
「中尾くん、さすがあのマリバレエアートの後継者だけあるなあ」
「ありがとうございます」
踊り終わったばかりの息で自信に満ちた一樹さんの声。
「それに、吉崎さん、やっぱりあなただ、あなたしかいない」
「そう…ですか」
誉められてるはずなのに…ちっとも嬉しくない…それより…
「それじゃ、撮影は明日からですから、よろしく」
「よろしくお願いします」
お辞儀をして、バーのそばに置いていたタオルとシューズ入れを取りにいった。
「ＪＩＮ、明日は前髪あげるからな」
背中に桐生さんの声を聞きながら、トウシューズを脱いだ。
「でも、社長が…」
囁くような低い声。
「この傷のことか？」
えっ？

思わず振り向くと、桐生さんがJINの前髪を指で上げて…
「たいしたことないじゃないか、それに、俺は人間っぽくていいと思うんだ」
傷…額の傷痕…
JINと目が合った。
戸惑った青い目が私を、そして、あわてたように目を伏せた。

ヒトシくんだ…
JINはヒトシくんだ…！

私は混乱したままスタジオを出た。

## JIN

ひさしぶりに作ったミルクティー。
お砂糖いっぱいでバレリーナの毒ね。
でも、今日はなんだか疲れて甘いものが欲しかった。

JINは…　ヒトシくんだった。

あの額の傷痕は…私をかばってケガしたときの傷痕…
それにあの顔だって…
少年から男になった顔だけど…あの顔はヒトシくん…
そして…
そして、あの深く青の瞳…
あれは絶対ヒトシくんの目…
私が間違えるわけない…あの目を…
だって…

なんで「はじめまして」なんて言ったの？
私のことを忘れてしまったの？
それともわからなかった？
でも、名前だってあのときのままだし、顔だってそんなには…

ヒトシくんとは…
私がニューヨークに行ってから音信が途絶えた。
着いてすぐに手紙を書いたわ。
だけど、住所をどうやって書けば日本に届くのか、どこに出しにいけばいいのかわからなくて、
ママに聞いても「忙しいからあとにして！」っていつも言われて、
メイドは言葉が通じないし…。
１ヵ月くらいして、やっとエアメールの出し方がわかって、手紙を出した。
でも、返事は来なかった。
何回も出したわ。一週間に一度は出してた。
だけど返事は来ない。

それから３ヵ月くらい経って、大きな分厚いエアメールが届いたの。
差出人は魚清のおかみさん。
中には私がヒトシくんに送った手紙が全部入ってた。
どれも封は開けられないまま…。

魚清のおかみさんの手紙には…
私がニューヨークに行って少しして、おじいさんの具合が急に悪くなって入院したこと。
入院費や生活費に困って、親方が福祉事務所に相談に連れて行こうとしてたときに、
突然ヒトシくんのお母さんが現れたってこと。
そして、お母さんがおじいさんとヒトシくんを引き取っていったってこと。
ヒトシくんのお母さんは住所を教えてくれなくて、だから、私の手紙もヒトシくんに
送れなかったからって、手紙を私に送り返したってことが書いてあった。

ヒトシくんのお母さんが現れた。
小さい頃ヒトシくんを置いて出ていっちゃった人が…。
ビックリしたけど、ヒトシくんはきっと嬉しかったんだよね。
お母さんと一緒に暮らせるようになって、おじいさんの面倒も見てもらえて、
きっとシアワセで…
だから…
私のことなんか忘れちゃったのかもしれない。
もう私のことなんか…

私はヒトシくんに出した手紙を捨てて、ヒトシくんのことを忘れようとした。

いえ、忘れたわ。
あんな昔のこと。たかだか小学生のときのことなんか、いちいち憶えてられないわよ。
転校していった子のことなんか、みんなそのうち忘れる。
ヒトシくんも私のことは忘れて、私もヒトシくんのことは忘れた。
それだけのことよ。

だけど、数年ぶりに会ったら、「おひさしぶり」くらい言わない？
べつにもう関係ないんだから、気軽にそれくらい言うわよ、ふつう。
なのに…　「はじめまして」ってなに？
本当に忘れちゃったってこと？
ううん、だって、あの額の傷痕を見たとき、ヒトシくん気まずそうに目を伏せたわ。
つまり、憶えてるってことでしょ？
だったら、どうして？
忘れたいの？　私のことを？

忘れたいんだわ…私のことを…
ううん、自分の過去を…！

そうよね、今や人気絶頂のトップモデルのJINが、小さいころは貧乏で、
お風呂も一週間に一度しか入れないくらい貧乏で、ボロい格好して、
みんなにいじめられてたなんてこと、知られたくないんだわ。
だから、私のことも知らないふりしたのよ。
過去をバラされたくないから。そんなことしたりしないわよ、くだらない。
だけどミーハー相手のモデルなら気にするのかもね。
スキャンダルっていうの？　バカみたい！

ヒトシくんは過去を捨てたんだわ。
私との思い出も…全部…。

べつにいいわよ。もう関係ないわ。
私だって、もうなんとも思ってないし、遠い昔のことだし。

だいたい、あれはヒトシくんじゃないわ。
無造作に見せながら計算されつくしたカットとスタイリングされた髪。
さりげないけど高級ブランドの上質な皮のジャケットとパンツ。
いかにもモデルっていう歩き方。
名前だって、JINなんて…。
あ…　ヒトシくんの名前、「仁」って書くのよね？
だからJIN？　くっだらない。
そこまでして過去を消したいわけね。

べつにいいわ、関係ないわ。
私だって変わった。
あの頃の甘えたミラじゃないわ。
プロのバレリーナの吉崎ミラよ。
そして、一樹さんのパートナーで恋人。

この仕事の相手役は、ヒトシくんじゃない、トップモデルのＪＩＮ。
それだけよ。
私だってプロよ。
キライなパートナーと恋人同士の踊りをしなきゃいけないときだってあるんだから。
これはただの仕事だわ。
私がプロのバレリーナとして名前を売るチャンス。
私はモデルのJINを利用して、一流になるんだわ。

ミルクティー甘すぎる。
流しに捨てて、コーヒーを入れた。

# 撮影初日

撮影の初日。
スタジオに入ると緊迫した空気。

照明が中央のバックスクリーンだけを照らして、その前にヒトシくんが、
いえ、JINが立っていた。
「照明もっと絞って！」
桐生さんの声がする。
照明に照らされたJINは、黒のタートルのタイトなタンクトップと黒のパンツ。
「JIN、睨むカンジで視線よこせ」
「今度は視線外して」
桐生さんの言葉に即座に応えるJIN…
それは…本当にプロのモデルで…
やっぱり、あれはJINだわ…トップモデルのJIN…
もう私の目には、あの人がヒトシくんに見えない…

「おまえなあ、マニュアルどおりじゃないか」
桐生さんの苦笑いする声。
え？　あれでもダメなの？
「上換えてみようか、おい、白いシャツ持ってきて！」
衣装のスタッフが白いシャツを持ってJINのそばに走った。
JINは、素早く黒のタンクトップを脱いで白のシャツを羽織った。
「JINさん、そのペンダント外してください」
衣装係がJINに手を出した。
「え、あ、ああ」
「それはいいんだ、つけさせといて」
桐生さんが衣装係に言った。
「はい」
衣装係はうなづいてその場を離れた。
「吉崎さん」
衣装係のスタッフが私に気づいて声をかけた。
「今JINさんのカメリハやってるので、先に着替えてきていただけますか？」
「はい」
「衣装は控え室に置いておきました。メイクもいますので」
「わかりました」
私はそっとスタジオを出た。

用意されていた衣装は白いシフォンのシンプルなジュリエット型の衣装。
でも、ラインストーンもスパンコールもついてない。
脚を上げてみる。うん、大丈夫、動きやすいわ。
メイクはナチュラル…だけど、さすがプロだわ、断然顔が映える。
メイクのスタッフが私の髪を真っ直ぐにプローしはじめた。
「あの、ジュリエットはシニョンにしてから後ろに縦ロールのウィッグつけるんです」
「桐生さんがナチュラルにということなので」
「そう…ですか」
ナチュラルって、私、踊るのよ？
これで踊ったら気がふれたときのジゼルみたいになっちゃうわよ。
いいけど、どうでも。

スタジオに戻って、隅のバーでストレッチをしてから桐生さんのところに行った。
「おお、吉崎さん、綺麗だ、うん、とっても綺麗だ」
桐生さんはニコニコして言った。
「あの…　髪は…ほんとにこれでいいんですか？
　踊ったらバサバサになっちゃうと思うんですけど」
「いいんです、自然のままがいいんです」
「そう…ですか…」
まあ、いいわ、私は知らない。
「それじゃ、ソロのパートを踊ってくれますか？」
「はい」
リノリウムの中央に立つと、曲が流れた。

アラベスクをすると髪がサラサラと顔にかかり、
グランジュッテをすると、軽やかに後ろに流れる。
ちょっと…気持ちいいかも…

「吉崎さん、踊るのは楽しいですか？」
「え？」
パシャッ！
「アハハ、いいなあ、今の顔、素の吉崎さんの顔だ」
な、なに言ってるのよ、踊ってる写真撮ってるんでしょ！
「それじゃ、JINも中に入って」

JINが照明の中に入ってきた
最初に着ていた黒のタートル。
そうね、私の衣装は白だから、その方が映えるわ。
「それじゃ、二人向き合って」
「ハ？」
私は踊るんじゃないの？
「ええと、そうだなあ、吉崎さん、ロミオとジュリエットが最初に出会う場面、
　あのカンジですよ、わかりますか？」
「え、ええ」
「二人とも手は後ろに組んで」
なにこれ、出会う場面はこんなポーズじゃないわよ？
「見つめあって」
え？
私は渋々JINの顔を見上げた。
なんとなく…目を見るのは…イヤで…くちびるを…
「吉崎さん、ちゃんと目を見て」
「は、はい」
しかたなく顔を上げると…無表情な青い目が…
「おいおい、二人とも、ケンカしてるんじゃないんだから」
桐生さんが苦笑いした。
「JIN、吉崎さんはこういう撮影ははじめてなんだから、
　おまえがリードしてやらなきゃダメだろ」
JINはチラッとだけ私を見て、桐生さんにうなづいた。
「いいか、JIN、吉崎さんはな、バレエ界の若手ホープだ」
桐生さんが真剣な顔になった。
「この写真集でバレエを知らない人にも名前を知られることになる」

なんだか…私…見透かされてる気がして…なぜこの仕事を引き受けたのかを…

「吉崎さんを潰すも引き上げるも、おまえにかかってるんだぞ」

そんなこと言ったって…この人には…JINには…私のことなんて…

「プロだろ、やれ」
JINは黙って桐生さんを見つめて…
そして…　私を見た。

JINの青い目は…　深い青の瞳は…
綺麗で…　優しくて…　哀しくて…
私は…見つめた…青い瞳を…
なぜなの…悲しくて…
まるで…目の前に…記憶を失った恋人がいるような…
愛し合った日々を忘れてしまった人を見るような…

　バカみたい…遠い昔の…子どもの頃のことじゃない…
　ただの…小さな思い出のひとつってだけじゃない…

「よし、今日はここまでにしよう」
私は急いでスタジオを出た。

一樹さんに会いたい…
一樹さんの黒い瞳を見たい…
一樹さんに抱かれて、今の自分に戻りたい…！

私はそのまま一樹さんの部屋に向かった。

# 肌の記憶

「やっぱり私断ろうかなあ」
私は一樹さんの腕の中。
「まだ始まったばかりだろ」
一樹さんは苦笑いしながら煙草に火をつけた。

バレエをやってる人は煙草は吸わない方がいいのに。
そう言うと、一樹さんは笑って言うの。
「俺は煙草くらいでダメになるような踊り手じゃないぜ」
私も一樹さんくらいの自信が欲しい。
自分のバレエに自信がないわけじゃない…
ただ…こんな混乱した気持ちがイヤ…

「簡単にチャンスを捨てるなよ」
「だって…　あの桐生さんて、ヘンなことばかりさせるんだもん、
　踊りじゃなくて、ただ黙って立って見つめ合えとか…」
「へえ」
一樹さんがおもしろそうに笑った。
「私はジュリエットを踊りに行ってるのに…わけわかんないわ、あんなの」
「それが桐生誠だよ」
「え？」
「被写体が今まで持っていたものを剥ぎ取って隠れていた魅力を引き出す、
　だからみんな桐生誠に撮って欲しがるんだ、あのJINだって桐生誠に発掘されて
　有名になったって話だぜ」」
「でも…あのＪＩＮって…」
何を言おうとしてるの…一樹さんに…
「あの人…実は…小学校の頃の…知り合いで…」
「へえ！」
「なんか…イヤなの…なんか…小さい頃のこと知ってるって…」
「俺だったら、昨日大ゲンカして別れた女とだって死ぬほど愛してるって顔で踊るぜ」
一樹さんはそう言って笑うけど…
「ミラ、おまえもプロだろ？　カメラの前では、あいつを死ぬほど愛してるジュリエットになれよ、
　個人的な感情は押し殺さないと本物のプロじゃないぞ」
「そう…ね…」
「知ってるか？　マリバレエアートの次の演目はジゼル」

「そうなの？」
「ああ、アルブレヒトは俺、そしてジゼルはミラだ」
「えっ？　ほんと？」
「今度はWじゃない、俺とおまえだけだ」
「すごい！」
「ミラの撮影が終わったら正式に発表するってさ」
「嬉しい！」
一樹さんが私を抱きしめた。
「今度の公演を成功させるためにも頑張れよ」
私は一樹さんの腕の中でうなづいた。
そうだわ、こんなことでくじけてなんかいられないわ、私には舞台がある。
あそこだけが私の居場所なんだから！
そして…この一樹さんの腕の中だけが…。

撮影二日目。
昨日と同じ衣装に着替えてスタジオに入った。
いつものように隅のバーでストレッチをして、準備完了。
大きくひとつ深呼吸をした。
そうよ、一樹さんの言うとおり、個人的な感情は捨てて、ロミオを愛するジュリエットになろう。

「JIN、吉崎さん、中に入って！」
桐生さんの声に、リノリウムの中央に向かった。
JINも昨日と同じ黒い服で照明の中に現れた。
無表情に…

いいわ、とにかく今はこの人がロミオ。
このロミオを愛するジュリエットを演じきるだけよ。

「ＪＩＮ、横向いて立って！　視線は真っ直ぐだ」
JINは桐生さんの指示に即座に従った。
「吉崎さん、JINの肩につかまって片脚を後ろにあげてくれるかな」
「アラベスクですか？」
「なんていうのかなあ？　こう脚が縦に一直線になるように…」

「パンシェです」
「そうか、どうもバレエ用語は覚えられなくてなあ」
桐生さんはそう言って笑って、
「手前側の肩ね」
私の右手をJINの肩に置いた。

右手に…JINの肩を感じて…　ガッシリとした肩…あの頃よりずっと…
バカみたい、何考えてるの？

「それじゃ、いくよ」

桐生さんの合図に、私はゆっくりとパンシェをする。
上体を倒して両脚が一本に見えるほどのアラベスク。
私は一人でもできる。パートナーがいなくてもできなければプロじゃない。
私の手は、JINの肩にそっと触れるだけで…
そして…微笑んだ…ジュリエットの微笑みを…

「吉崎さん」
「はい？」
「そんな舞台用のスマイルはしないで」
「えっ？」
「今そんな気分じゃないんだろ？」

息が止まりそうになった。

見透かされているような…心を覗かれているようで…落ち着かなくなって…
でも、私はここにジュリエットを演じに来ているのよ？
舞台用の微笑みって、だったら、どうしたらいいの？
個人的な感情は捨てて、ジュリエットになりきらなきゃいけないのに、どうしたらいいの？

「ちょっとみんな外に出ててくれ！」
桐生さんがスタッフ全員に声をかける。
広いスタジオの中に、桐生さんと私、そしてJINだけが残されて…
私は混乱したまま立ち尽くして…

「吉崎さん、そうだな、膝を抱えて床に座って」
「え？　あ、はい」

「JIN、おまえは後ろから吉崎さんを抱きかかえるようにして座って」

えっ？

JINの気配を背中に…JINの腕がゆっくりと私の身体を…
私は反射的に身を固くした。

「JIN、もっとしっかりと吉崎さんを抱きしめて」

JINの腕が…私の身体を…JINの体温が…背中に…

「二人とも目をつぶって」

何をしようというの…何を…

「いいか、二人とも、相手を感じて」

相手を感じる？　どういうこと？　何を感じろっていうの？

「相手の体温、息遣い、肌の感触、匂い、すべてを、ただ感じてごらん」

イヤよ…イヤ…

「JIN、吉崎さんの肩に顔を埋めて」

JINの顔が…私の首筋に…

イヤ…イヤ…イヤ…

「なんにも考えないで感じてごらん、ただ、相手を肌で感じるんだ」

ほのかに上質のオーデコロンの香りが…
そうよ…これはJINで…
なのに…私の背中は…抱きしめられている身体は…
私の気持ちとは反対に…感じて…感じようとして…
記憶の扉を開けようと…

苦しい…イヤ…開けないで！
私は必死に抵抗する…
その扉を開けたら…
私は壊れてしまいそうで…

怖い…

それは…小さい頃…ニューヨークで壊れていった私の…あの感覚が…
イヤ…もうあんな思いはイヤ…あんな苦しみはイヤ…
何も感じたくない…
感じたくない！　感じたくない！　感じたくない！
いやな汗が噴き出して…身体が震えて…

「す…すみません…あの…私…気分が…」
立ち上がってスタジオから走り出た。

イレで吐いた。
何回も何回も。
何も出てはこないのに、吐き気だけが次から次へと押し寄せる。
助けて…怖い…何かが…私の中から噴き出してきそうで…怖い…

控え室で安定剤を飲んだ。
ニューヨークのあの頃は、毎日ずっと飲みつづけていた。
今は舞台に乗る前だけだったのに…。
もうイヤ…　こんなこと…　なんでやらなきゃいけないの…
こんな…

「吉崎さん、気分はどうだい？」
桐生さんが控え室のドアから顔を出した。
「す…すみません…あの…ちょっと疲れていて…」
「そうか」
桐生さんは静かに微笑んだ。
「今日はこれで終わりにしよう」
ホッとした。

だって無理よ…こんなこと…
「それじゃ、お疲れさん」
「お疲れさまでした」

私は重たい身体をなんとか立ち上げて控え室を出た。

## 体験レッスン

今日は撮影は休み。
よかった。
イヤよ、もうあんなこと、バカバカしい、相手を感じろだとか、そんなことばっかり。
さっさと写真撮って終わってほしい。

マリバレエアートも休みだけど、私は管理室に頼んでレッスン室を開けてもらった。
休みの日だって身体を動かさないと、すぐに踊りに現れる。
だから、他のレッスン室にも何人か来て練習していた。
カズキさんは、今日はマリ先生と一緒に、次のジゼルの振り付けと演出をする
ロシアの演出家に会いに行ってる。
なんとなくホッとしてる…だって…なんか今日は一人になりたかった…

バーにつかまってストレッチをすると、身体の緊張感がほぐれてくる。
やっぱり私の場所はここなんだわ、あんな薄暗いスタジオなんかじゃなくて。

レッスン室のドアが開いて、
「吉崎さん」
え？　桐生さん…？
「お邪魔していいかな」
「え…あ…あの…」
どうして？　今日は撮影は休みのはずでしょ？　しかも、なんでここに…
「いやあ、もう少しバレエのこと知りたいと思いましてね」
「え？」
「というか、実はね、目の前で見てみたいなあと思ってね、ほら、ジャンプしたり
　クルクル回ったり、あれ、舞台の上じゃなくて、もっと近くでね」
桐生さんは子どものように好奇心で輝く目でそう言って笑った。
「やってもらえますか？」
「え…　ええ…」
「それじゃ、両足をバッと広げてジャンプするやつ」
「グランジュッテですか？」
「うん、とにかく見せてくれますか」
「は、はい」
桐生さんはニコニコしながらレッスン室の隅の床ににあぐらをかいた。

私は端から連続してグランジュッテで飛んで見せた。
「おお！　すごいすごい！」
桐生さんは子どものように喜んで拍手した。
「両足一直線にして、よくそんなに高く飛べるもんだなあ」
桐生さんは立ち上がって真似をした。
「イテテ、僕にはムリだな」
私は思わず笑った。
「誰でもはじめはできないんです、私も小さい頃はそうでしたから」
「ほう、吉崎さんでも？」
「ええ、練習していくうちにできるようになるんです」
「そうかあ、でも、僕にはやっぱりムリだなあ」
桐生さんはそう言って頭を掻きながら苦笑いした。
「あ、そうそう、今度はあのクルクルッて回るやつ、なんだっけな、
　よく黒鳥でやるでしょ？　32回転だっけ？」
「フェッテですね」
「名前はわからないけど、それ見せてくださいよ」

私は中央に立って、そして回り始めた。
１回…２回…３回…
勢いがついて、私の頭の中は、ただ回るだけになって…
29…30…31…32！

「おお！　ブラボー！」
桐生さんが立ち上がって拍手した。
無邪気な桐生さんの様子に、私はニッコリ笑ってバレエ風のお辞儀をしてみせた。
「ねえ、吉崎さん、僕にバレエを教えてもらえませんか？」
「え？」
「あ、基礎の基礎だけです、ちょっとやってみたいんだ」
「いいですよ、えっと、それじゃ、バーについてください」
そのとき、レッスン室のドアが開いた。

振り向くと…

え？　JIN…

「おお、JIN、こっちだこっちだ」
桐生さんがJINを手招きした。

なに？　どういうこと？
「あの…　この格好で来いって言われたんですけど…」
JINが戸惑った顔で桐生さんに言った。
真っ白なTシャツとジーンズ…
「そうそう、それでいいんだ」
何をしようっていうの？
「吉崎さん」
桐生さんが私の方を向いた。
「僕とJINにバレエを教えてもらえませんか？」
「え？」
「二人ともバレエのこと全然わからないんですよ、だから体験してみたいんです」
「はあ…」
私はチラッとJINを見た。
戸惑った顔で立っている…
「やはり、ほら、バレエのことわからないと撮影もうまくいかないしね」
「そう…ですか」
いいわ、べつに、教えるだけなら…
「わかりました、それじゃ二人ともバーについてください」

私はベビークラスで使っている練習用の曲をかけた。
「両手をこうやってバーに乗せて、脚をそろえて、足先は外です」
二人の間に入って一番をやってみせた。
「そしてプリエ、プリエ、ドミプリエを繰返して、次はゆっくりグランプリエ」
桐生さんとJINが親権な顔で見ていた。
「これをやってください」
二人がきごちなく真似をする。
「桐生さん、お尻引っ込めて！」
私は桐生さんのお尻をグイッと押した。
「ああ、お腹出しちゃダメ！」
今度はお腹をグイッと押した。
「ああっ、またお尻出た！」
お尻を押すと、またお腹が出る。
ダ、ダメ、笑っちゃダメ、だって、ほら、見てよ、桐生さんの真剣な顔！
「次は足を二番に開いて同じことをしてください」
私は一度やってみせた。
「桐生さん！　お尻をもっとキュッと縮めてください！」

「ど、どうやって？」
「お尻の穴をキュッと縮めるイメージです」
「お尻の穴？　なんかオナラ出ちゃいそうだな」
桐生さんが泣きそうな顔で言うから、可笑しくて思わず笑った。
「笑わないでくださいよぉ、こっちは真剣なんだからあ」
「ご、ごめんなさい」
私は必死で笑いをこらえて、JINを見た。
あ～あ、肩が上がっちゃってる。
私は思わずJINの肩をグイッとつかんだ。
「JINさん、肩はこう、両方の肩甲骨をつけるカンジで」

汗ばんだ肩の感触が…

「や～い、JINも叱られたあ」
桐生さんが子どものようにはやしたてた。
「桐生さん！　人のことより、またお尻がダランとしてますよ！」
「は、はい！」
桐生さんがお尻にキュッと力を入れた。

こうして40分、私はすっかり初心者クラスを教えてる気持ちになっていた。
「はい、以上です、お疲れさまでした」
私がそう言った途端、二人は同時に床に座り込んだ。
真っ赤な顔で汗だくになってる。
「す、すごいなあ、こんなこと毎日やってるんですか」
桐生さんがハァハァいいながら聞いた。
「いいえ、これはベビークラスのプログラムです」
「ベビークラス？」
「３歳から幼稚園児まで」
「なんだよぉ、幼稚園児レベルかあ」
「子どもたちは汗もかかないでここまでやりますよ」
「幼稚園児以下ってことかあ、まいったなあ」
桐生さんはそう言って笑った。
「でも、気持ちよかったなあ、ひさしぶりだよ、こんなに汗かいたの、なあ、JIN」
JINはチラッと桐生さんを見て、少しだけ微笑んだ。

汗で濡れたJINの前髪が上がって…額が見える…あの傷痕が…

「そうだ、吉崎さん、せっかくだから何か踊って見せてくれませんか？」
「え？　何を？」
「なんでもいいです、そうだなあ、楽しそうなやつを」
「は、はい」
「JIN、お前はこのままここに座って見てろ」
桐生さんは立ち上がってカバンからカメラを取り出した、
「写真撮っていいですか？」
「え…」
「あ、べつに写真集に使うわけじゃないですから、ただの僕の趣味です」
桐生さんはそう言ってニッコリ笑った。
「どうぞ」

私はデッキのそばに行って曲を選んだ。
楽しそうなやつ？　こんぺい糖？　そうね、これにしよう。
オルゴールのような独特な曲が流れて、私はこんぺい糖の踊りを踊った。
カメラのシャッターの音がするけど、気にしないようにしなきゃ…。
曲が終わると、桐生さんはもう一曲踊ってくれと言った。
いいわよ、えっと、次は「眠りの森」の第三幕のバリエーション。

踊っているうちに、私の頭の中は踊りだけになっていって…
もうシャッターの音もまわりも私の意識には入ってこなかった。

拍手の音で我にかえった。
「いやあ、すごいなあ！　やっぱりすごい！」
桐生さんがニコニコして言った。
「舞台の上以外で踊るのを見れるなんてなかなかないもんなあ」
「こんな格好じゃ雰囲気出ないですけど」
私はレオタードとレッグウォーマーを指差して見せた。
「いやあ、それがいいんですよ、バレリーナの裏側、美しい」
そのとき、ドアが開いて男の人が顔を出した。
「JINさん！　そろそろ行かないと、時間押してるんで」
「え、あ、はい」
ＪＩＮがあわてて立ち上がった。
「あの、次の仕事が…」
「ああ、こっちはもういいよ、お疲れ」

JINは桐生さんにペコッと頭を下げて、私をチラッと見ると黙って頭を下げて出ていった。

# 写真集

「吉崎さんに見せたいのがあるんですよ」
桐生さんが汗を拭きながらカバンから本を出してきた。

「これ、W-BLOODの写真集、見たことありますか？」
「いいえ」
「僕が撮ったものじゃないんだけど、JINがどういう仕事をしているのか見て欲しくてね」

べつに見なくてもわかるわ…
ただのモデルでしょ…

「まあ、ちょっと見てくださいよ」
私を床に座らせて、桐生さんがパラパラとページをめくる。
「これが類」
桐生さんが指差したのは中性的な顔立ちの長髪のモデル。
「今、彼は尾上優之丞と死闘を繰り広げてますよ」
桐生さんはそう言って笑った。
「そして、これはマーク」
クリクリとした巻き毛のイタリア人のような情熱的な目をしたモデル。
「彼は別の意味でリタと死闘を繰り広げてる。なんせ女に興味がないんでね」
「え？」
「カルメンを愛するホセの気持ちがわからないらしい」
桐生さんはそう言って苦笑いした。
「そして、これがJIN」
無表情な青い目がこっちを見ていた。
「ほら、見てごらんなさい」
桐生さんはパラパラとページをめくっていく。
ファッション・ショーの舞台に立つJIN、女性モデルと映っているJIN、
華やかな世界の華やかなライトを浴びているJIN…
私の知らない人…

「どれも笑ってないでしょ」
「え？」
「笑ってないっていうより表情がないんですよ」
私は桐生さんが何を言いたいのかわからなくて、黙って顔を見た。
「まあ、それがクールだってウケてるんですけどね」

桐生さんは私の視線を感じてなんかないようにそう言って笑った。
「僕はトップモデルのJINに興味はない」
桐生さんはそう言いながらカバンに手を突っ込んだ。
「興味があるのはこっちのJINです」
そう言って、もう一冊の本を私の前に置いた。

タイトルは「BOY」…

無造作に伸びた髪の後姿…
これは…

「これは僕が撮った中学生くらいのJINです」
「え？」
「彼の母親が彼を僕のところに連れてきたんですよ、いわゆる売り込みってやつですね」
お母さんが…？
「普段はそういうのは相手にしないんですけどね、僕は彼に興味を持った」
桐生さんはそう言いながら、１ページ目をゆっくりと開いた。

カメラを避けるように顔を背けているJIN…いえ…これは…

「これ撮るのにね、一ヶ月かかったんです」
桐生さんはそう言って笑った。
「カメラ向けると撮らせますけどね、なんていうのかな、全部無表情、
　まるで証明写真みたいでね、母親の言うなりになってるんだけど、
　本人は何も言わない、ひとことも、ただ黙ってるだけでね」

私は顔を背けている少年の横顔を…

「だから一ヶ月、カメラはいっさい持たないで、毎日のように彼と会った。
　公園に連れていったり、メシ食ったり、ゲームセンターも行ったな、
　でも、ゲームやったことないって言うんですよ、珍しいでしょ、中学生の男子が」
それは…だって…それは…そんなヒマなんてなかったし…そんなお金も…
「そのうち、少しずつ、本当に少しずつだけど、僕に話してくれるようになってね、
　どうしてモデルになりたいんだって聞くと、金が欲しいからって言うんですよ、
　おじいさんが入院していて、その金が必要なんだって」
「え…でも…お母さんがいるのに…」
桐生さんが私の顔を見てフッと笑った。

「W-BLOODの社長って誰だか知ってますか？」
「い、いいえ」
「JINの母親です」
「えっ？」
「彼女はね、JINに言ったそうです、あんたとじいさんを引き取ってやる代わりに働けって」
「えっ!?」
「じいさんには最高の医療をつけてやるって、ただし、その金はあんたが稼げってね」
「う…そ…」
「JINのおじいさんはかなり重い心臓病でね、この数年間で何回も手術を繰り返してる」
おじいさんが…あのおじいさんが…
私は…ニコニコと笑うおじいさんの顔を思い浮かべていた…
「まあ、簡単に言えば、JINはW-BLOODっていう事務所に借金があるってことです」
「だ…だって…おじいさんは…お母さんの…お父さんで…」
「よく知ってますね」
桐生さんが微笑んだ。
「あ、いえ、ただ…そうなんじゃ…ないかと…思っただけで…」
「そうなんですよ、でも、あの社長は母親っていうより商売上手なんだな、
　ここまでW-BLOODを大きくしたのは、やはり彼女なんだしね、
　彼女にとってJINは息子というより、所属モデルの一人なんだな、しかも一押しのね」
桐生さんはそう言いながら２ページ目をめくった。

風に吹かれて前髪が後ろに流れている横顔…
額の傷痕がハッキリと見えていた…

「この傷ね、どうしたんだって聞いても何も言わないんですよ、
　実は母親は、社長はその頃から美容整形で取りたがっててね、
　でも、本人がどうしてもイヤだってきかないから説得してくれって言われちゃってね」
桐生さんが苦笑いした。
「それでね、どうして取りたくないんだって聞いたんですよ、
　そしたら、ボソッと、囁くような声で、俺の勲章だから…って」

私は…息が止まりそうになって…

「だったらつけておけ、堂々と胸張ってつけておけって言ったんです、
　そしたら、初めて微笑んで、そして、この写真を撮らせてくれた」

胸の真ん中が…疼いて…なに…イヤだ…なに…

「あとこれね」
桐生さんは次のページをめくった。
公園のベンチで前かがみになって座っている少年…
「これ、見えますか？」
桐生さんが写真の胸元を指差した。
銀色の鎖の先に小さなメダル…
これって…まさか…
「JINはいっつもこれつけてるんですよ」
え…
「ちょっと外してくれないかなって言うと困った顔して、それでも外すけど、
　写真撮り終わるとすぐにまたつけるんだ」

心臓が…トギトギして…なぜか…クラクラしてきて…

「なんでずっとそれつけてるんだって聞くと、約束したからって」

私…今…どんな顔してるの…イヤだ…何も感じたくないのに…

「一生つけてるって約束したんだそうです」
桐生さんはそう言って笑った。
「今では他の仕事のときは取ってるみたいだけど、僕の仕事のときには
　つけさせておくんです、ほら、これ」
桐生さんが次のページをめくった。
口もとから下が大写しになった写真。
Ｔシャツの襟首からハッキリとペンダントが見えていた。
「このペンダント、バレリーナの絵が描いてあるでしょ」

私は身を固くして…心臓の音が…耳元まで聞こえてきそうで…

「裏に文字が書いてあるんですよ、バレエのコンクールのメダルらしい」

私は…身動きもできず…ただ…写真の中のペンダントを見つめて…

「そして、名前が…」
桐生さんが私の顔を見た。

私は桐生さんの顔を見ることができなくて…

「おっ、そろそろ行かないと」
桐生さんが立ち上がっても、私はそのまま座り込んだままで…
「その写真集差し上げますよ、僕はそれでかなりデカイ賞を撮ったんです」
そう言って笑うとレッスン室から出て行った。

私は…床に座ったまま…
一人…
ただ写真の中の…ヒトシくんを見ていた…。

## **JIN**の母親

コーヒーを入れて、ソファに腰をおろした。
目の前に置いていた写真集を手にとってみる。

BOY…
JINの少年時代…
いいえ…この後姿は私の知っている…

カメラに顔を背けている写真…
『写真…キライなんだ…』
そう言ってた…目が赤く映って気持ち悪いからって…
なのに…今は、カメラに映る仕事をしてるのね…
おじいさんの入院費のために…
おじいさん…入院してたなんて…あの優しいおじいさん…

風に吹かれて前髪が後ろに流れて…
傷痕が…あのときの傷痕がハッキリと見える…
『俺の勲章』
そんなこと…桐生さんに言ったなんて…

私があげたペンダント…
ずっとつけてた…約束したからって…ずっと…
私がニューヨークに行って…音信が途絶えたあとも…ずっと…

ページをめくるたびに…
私の知っている面影を残した少年の姿がそこにあった…
これはJINじゃない…
私の知ってるヒトシくん…
中学生のヒトシくん…
私が見れなかった中学生のヒトシくんの姿…
だけど…私の知ってる面影がいっぱい残ってるヒトシくん…

グラウンドを走るヒトシくんの写真…
そうよ…ヒトシくんは走るのがすごく速くて…
リレーで一等取って…私に一等のメダルをくれた…
『ミラに一等のメダルをあげたかったんだ、だから、俺、がんばった』

どのページのヒトシくんの写真にも…
あのペンダントをつけているヒトシくんがいる…
遠く離れて…
音信不通になって…
お互いどこにいるのかもわからなくなったあの頃でも…

私は忘れられていたのではなかった…
遠く離れて、お母さんに引き取られてシアワセで…
だから私のことなんか忘れてしまったんだと思ってたあの頃…
ヒトシくんは私のペンダントをつけて…
額の傷痕を『俺の勲章だから』って…
そう思い続けていてくれてた…

ヒトシくんは私を忘れないでいてくれてた…
少なくとも…この写真の頃は…
私が心に封印をして忘れようとしていたのに…

そばにいたかった…
中学生のヒトシくんのそばに…
私は指で写真のヒトシくんの顔をなぞる…
でも…今…ここにいる…
私が見れなかったヒトシくんが…
見たかったヒトシくんが…
離れていても…私を想っていてくれたヒトシくんが…

私はクローゼットの奥にしまっていた箱の中から、古ぼけた宝石箱を出した。
蓋を開けると、埃で曇った青いビー玉と、リボンの色が褪せたメダルと、
メッキがはげかけた指輪…
時間が変えてしまった思い出…
だけど、あの頃は輝いていた…
それは確かだった…

今のヒトシくんが…JINが…もう私のことは忘れてしまったとしても…
この写真の中のヒトシくんは私を忘れてはいなかった…
今の私は…もうあの頃のミラじゃなくなったけれど…

ヒトシくんのことを大好きだったのは本当だった…

もう二人の小さな恋は終わってしまったのだとしても…
あのJINの中に私がいたことだけは確かで…
私の中にヒトシくんがいたことだけは確かで…

もうそれだけでいい…
明日からの撮影は…私はJINの中にいたヒトシくんを思い出そう…
もうそれがなくなっているとしても…
あの中にいたってことだけは確かなんだから…

コーヒーに口をつける。
苦い…
コーヒーを飲むようになったのはいつからだろう…
ほんとは苦いのはキライだったのに…
甘いミルクティーが大好きだったのに…

いつから私は変わってしまったのだろう…

撮影三日目。

JINは真っ白のＴシャツとジーンズで照明の中に入ってきた。
少しだけ…ヒトシくんの面影を見るようで…ドキッとして…
少しだけ…なんとなく…私…ホッとしてる。
今日の私は薄いピンクのシンプルなキャミソール型の衣装。

桐生さんは、私に膝を抱えて座るように言って、
JINに後ろから抱くように座れと指示した。
おとといと同じ格好。
「二人とも相手を感じて」
私は静かに目を閉じた。

男らしくガッシリとした身体…
長い腕…

ほのかに香る上質のオーデコロン…

だけど…

私は…私の感覚は…探してる…
その中に…
ヒトシくんを…ヒトシくんの残像を…ヒトシくんの感触を…
背中に感じる体温…
私の身体は思い出す…ヒトシくんの体温を…
今はJINになってしまったこの人の腕が…
かつて私を抱きしめてくれたことを…
この腕の中で…
私はホッとして安らぎを感じてシアワセだった頃を…
今のJINの中には私がいなくても…
あの頃のこの人の中には…たしかに私がいたことを…
そして…
小さかった私の中にも…たしかにヒトシくんがいたことを…

「OK！」
桐生さんの声にビクッと目を開けた。
私…まるで眠っていたみたいで…頭がボーッとしてる。
「よし、次は向かい合って、そうだな、立てひざになって、そう」
私とJINは向かい合った。
JINの目が私を見つめていた…何か言いたそうな目で…
「JIN！　おまえ、指で前髪かきあげろ！」
JINは、え？って顔して桐生さんを見て、静かに息を吐いて…
無造作に前髪をかきあげた。

傷痕が…ハッキリ見える…

JINはチラッと私を見て目を伏せた。
「よし、それじゃ…」
そのとき、スタジオのドアが開いた。

女の人のシルエット…　誰？
「桐生ちゃん、お世話さま」
桐生さんのそばに寄ってきたその人は、真っ赤な髪にラメ入りの黒のタイトスーツ。

うわっ、なにあれ、すっごい派手な人…！
「おお、和子さん、ひさしぶり」
「やだ、和子さんなんて呼ばないでよっ」
女の人が声をひそめて言った。
「アハハ、ごめんごめん、キャシーさん」
誰なんだろう、桐生さんとあんなに親しげに話してるなんて…。
女の人がこっちを見た。
「あら、あれがJINの相手役？」
「そう、吉崎ミラさん、吉崎さん、ちょっとこっち来て！」
桐生さんが私に向かって手招きした。
私はわけがわからなくて、チラッとJINを見ると、JINは無表情に下を向いていた。

「吉崎さん、この人がW-BLOODの社長」
えっ？　それじゃ…ヒトシくんの…いえ、JINのお母さん？
「は、はじめまして、吉崎です」
「どうも、キャシーです」
“キャシー”さんは、値踏みをするように私を上から下までジロッと見た。
「可愛い方ね」
そう言って微笑む目が笑ってなくて、なんか…この人…怖い…。
「あら？」
“キャシー”さんの顔が急に真顔になって、照明の中のJINの方を見た。
「JIN！　前髪下げなさい！」
JINは戸惑った顔で下を向いた。
「キャシー、僕が上げるように言ったんだよ」
桐生さんが穏やかな声で言った。
「やだ、困るわ、桐生ちゃん、わかってるでしょ、あの子のアレ」
“キャシー”さんは不快そうな顔をして言った。
「あんなの写さないでよ」
「いや、でもね」
「JIN！　ちょっとこっち来なさい！」
JINは無表情に立ち上がって、こっちに来た。
「桐生ちゃん、ちょっといいかしら、JINと話したいことがあるのよ」
「ああ、いいよ、それじゃ10分休憩にしよう」
キャシーさんとJINが出ていって、スタッフもぞろぞろとスタジオを出た。
私も…　何か飲もうかな。

廊下の自販機で…何にしよう…缶コーヒーってまずいのよね。
ロイヤルミルクティーか。これにしよう。

冷えたミルクティーの缶を持って、控え室に戻ろうとすると、
「何考えてるのよ！」
すぐそばの控え室から、苛立ったキャシーさんの声が聞こえた。
「そんな醜い傷痕さらしたりして！　みっともないでしょ！」
あ…
「桐生ちゃんがなんて言ってもね、絶対拒否しなさいよ！」
私は…なんとなく…その場に立ち尽くして…
「ジャン・マレンコの専属モデルに決まったのよ、あんた！
　それがそんな醜い傷痕がついてるなんてわかったらパーよ！」
ジャン・マレンコって…ミラノの超一流デザイナーじゃない…！
「とにかく、撮影が終わったら、ミラノに行く前にさっさと手術させるからね！」
「いやだ」
JINの声…
「いやだなんて言ってられないわよ！　あんたプロのモデルなんだからね！」
「お、俺は、みっともねえなんて思ってねえし、ぜ、ぜってえ取りたくねえ」

え…

「ああ、いやだ、あんたのしゃべり方！　貧乏くさいったらないわ！」

なに…それ…

「どもるし、育ち丸出しのしゃべり方で恥ずかしいったら！
　人前でしゃべってないでしょうね！」
「ね、ねえよ」
「とにかく手術はさせるわよ！　いいわね！」
「いやだ！　ぜってえこれは取らねえ！」
バタンとドアが開いて、JINが飛び出してきた。

あ…　目が合っ…ちゃっ…た…
ど…どうしよう…私…
「あ、あの…」
JINが、え？って顔で私を見た。

「こ、これ」
思わずミルクティーの缶を差し出し…ちゃった。
「ど、どうぞ」
そのまま自分の控え室に駆け出した。

やだ…
聞いてたのバレバレだったわよね…
心臓がドキドキしてる…
あの傷痕…　取れって…
でも…　JINは…　イヤだって…　ぜったい取らないって…
それは…

「吉崎さーん、撮影再開しまーす」
スタッフが顔出して、
「は、はい」
私はあわてて控え室を出た。

# 傷痕

撮影が始まった。
スタジオの隅に、キャシーさんのシルエットがぼんやり見える。
イヤ…だな…あの人が見てるなんて…
ううん、そんなこと気にしちゃダメ。　今は集中しなきゃ。

私とJINは、立てひざをして向かいあった。

なんとなく…ＪＩＮの顔が見れない…
さっきの話を聞いてたこと…バレてる…ぜったい…

「JIN、吉崎さんの頬に手をあてて、吉崎さんは目をつぶって」
よかった、顔を見なくてすむ…　私はホッとして目をつぶった。

そっと…ゆっくり…JINの手が…私の頬に触れる…
大きな手…長い指…

だけど…

私の頬は憶えていた…この手の感触を…温かさを…

心が…あの頃に戻る…
この手が大好きだったあの頃…
ヒトシくんといるとホッとして…シアワセだった…あの頃…
ヒトシくんが大好きだったあの頃…
いろいろな場面が次々と浮かんできた…
手をつないで一緒に学校へ行ったこと…
魚清で働いて、ホースで水かけあって、きれいな虹が見えたっけ…
なにげない場面が次から次へと…
そう…いじめっ子たちにいじめられて、ヒトシくんが私を助けてくれた…
血だらけになって…自分の方がすごいケガをしてるのに…
私のことばかり気遣って…
血がいっぱい出て…三針も縫って…傷痕が残っちゃって…
でも…
男の勲章だよって…
『好きな子を守ってケガしたんなら、それは男の勲章だって、だから堂々と胸張ってろって』

あの傷痕が今でも…

え？

さっき…

この人は…　ぜったいに取らないって…
あの傷痕をぜったいに…

あっ!?

私は思わず目を開けて、JINの顔を見た。
JINがちょっと驚いた顔で私を見た。
前髪はもう下ろされていた。
だけど…
あの傷痕は…

この人の中に…　　私がいる…！

今もこの人の中には私がいる！

私はゆっくり立ち上がった。
そして、驚いた顔で私を見上げているJINの前髪を、指でそっとかきあげた。
そして…

傷痕を指でなぞって…

そっと…　　くちづけをした…

ああ…この人の中に私はいる…
あのときから…ずっと…私はこの人の中にいた…
この傷痕がある限り…私はこの人の中にいるんだ…！

心が震えて…
何がが壊れる…
ううん…それは…
凍っていた私の心が溶けて…

私は感じた…苦しいほど…胸が痛くなるほど…感じた…
私の感情を…

私はこの人が好き…！
ずっと好きだった…！
離れ離れになっていたときも…
そして…
今でも…
たとえ、この人がJINになってしまっても…
私は…この人の中のヒトシくんが…今でも好きなんだ！

涙が流れて…
目を開けると…
JINが…私を見上げていた…
その青い目からは…涙が流れていた…

私たちは見つめあった…
涙で濡れた目で見つめあった…
潤んだ青い瞳の中に…私が映っていた…
哀しそうな…苦しそうな…青い瞳…
だけど…そこには…私だけが映っていた…

JINの手がそっと私の腕をつかんで…
ゆっくりと抱き寄せた…
私は彼の腕の中で目をとじる…

ああ…この人の腕の中は…なんてホッとするんだろう…
好きだった…この腕の中…ここに抱かれるのが好きだった…
忘れてた…ううん…忘れようとした…
この腕の中にいるシアワセを失ってしまった悲しみを感じたくなくて…
感じたら壊れてしまいそうで…怖くて…
私は封じ込めたんだ…

「桐生ちゃん、悪いんだけど、そろそろ終わりにしてくれない？」
キャシーさんの声で現実にかえった。

まるで夢から覚めたように、私とＪＩＮは身体を離した。

「今からジャン・マレンコの事務所と打ち合わせがあるのよ」
桐生さんは、しかないなあって顔をした。
「わかったよ」
「それからね、撮影、明日で終われないかしら？」
「え？」
「実はジャン・マレンコの専属モデルに決定したのよ」
「そりゃそりゃ」
「あさっては最終の打ち合わせで、その次の日にはミラノに行かなきゃならないの」
「そうか」
桐生さんはフーッと息を吐いた。
「それじゃ、続きは帰国してからだな」
「それはムリよ、契約は一年なの、最低一年は帰ってこれないわ」
え…
「あのジャン・マレンコの専属モデルよ？　今までの専属モデルジョッシュを切って、
　ぜひJINを使いたいってジャンが言ったのよ」
キャシーさんは一人で興奮してしゃべっていた。
桐生さんは、私とJINをチラッと見てからキャシーさんに言った。
「それじゃ、明日は一日開けてもらうよ」
「ええ、それはしかたないわ、ＪＩＮ！　行くわよ！」
JINは私をチラッと見て、無言でキャシーさんと出ていった。

明日で終わり…。
明日で会えなくなる…。

私はボーッとスタジオのドアを見つめていた。

## 最後の撮影

今日で撮影が終わる。
望んでいたはずなのに…　早く終わってくれればいって…
でも…

今日のJINは白い木綿のシャツにジーンズ。
私は透けるように薄いブルーのシンプルなシフォンの衣装。
桐生さんはスタジオからスタッフを出した。
スタジオの中には、桐生さんとJINと私だけ。

「なんだ？　二人ともなんか固くなってるぞ」
桐生さんがそう言って笑った。
「そうだなあ、ちょっと話でもしようか」
桐生さんはそう言いながら、リノリウムの真ん中にあぐらをかいた。
「JINも吉崎さんも座って」
私とJINは桐生さんのそばに座った。
「吉崎さんの小さい頃の夢は？」
「夢？」
「大きくなったら何になりたいとかそういうやつですよ」
「私は…バレエの先生…です」
「ほう、今じゃ一流のプロのバレリーナだもんなあ、夢を遥かに超えたんだね」
「ええ、まあ…」
「JINは？」
JINが戸惑った顔でチラッと桐生さんを見て、
「俺は…」
そう言ったきり、下を向いて黙ってしまった。

魚屋さん…よね。
でも、JINこそ、そんな小さな夢を遥かに超えたんだわ。
トップモデルになって、あの高級ブランドのジャン・マレンコの専属になるほどの…。

「僕はね、心理学者になりたかったんですよ」
桐生さんが口を開いた。
「でも成績が悪くてなれなかったんだけどね」
そう言って笑った。
「写真はただの趣味でね、気が向くとフラ〜と街に出ていろんなものを撮ってたなあ。

　でもね、あるとき気がついたんだ、心理学よりずっと人の心が見えるんだってね」
桐生さんは穏やかに微笑んだ。
「写真はね、確かにいくらでも誤魔化しがきくんだよ、ライトやメイクでシワなんて
　見えなくできるし、どんなブスでもある程度きれいに撮れる」
桐生さんは笑って、そして真顔になった。
「でもね、ここだけは誤魔化しがきかない」
そう言って胸の真ん中を指で押さえてみせた。
「どんなに誤魔化しても、隠しても、その人の心の模様が映ってしまう、
　どんなにうまく演じようと思ってもね」

私は…最初のときの自分のことを言われているようで…

「だから、ある意味とても残酷だ、けれど、とても正直だ」
桐生さんはそう言って微笑んだ。
「二人とも、ちょっと目をつぶって」
私は戸惑いながらも目をつぶった。
「いいかい」
桐生さんの穏やかな声だけが聞こえる。
「撮影は今日で最後だ」
胸が…ズキンとした…
「もう嘘や誤魔化しをしている時間はない、これは愛の物語だ、
　いや、JiNと吉崎さんに愛し合えって言ってるんじゃない、
　ただ、誰かを深く愛する気持ちは人間誰だって持ってる…」
桐生さんの声が静かに響く…
「自分の中のその気持ちを感じてくれ、誰かを深く愛する気持ちを、
　この一瞬だけ、ただ感じて…正直に…素直に…」

沈黙が流れる…
愛する気持ちを…素直に…

「今のこの瞬間を…けして後悔しないためにね」

そう…私は…昨日…JINの中にヒトシくんを見て…JINの中に…
まだ私がいるってわかって…だけど…また離れ離れになる…
接点のなくなった二人の道…今…この瞬間だけ…出あうことができた…
だから…今だけ…今だけは…

「二人とも目を開けて」
穏やかな桐生さんの声で、ゆっくりと目を開けると…
JINが私を見ていた…深い青の瞳で…

私たちは見つめあった…
何も言わず…
お互いの目の中に…自分の姿を探した…

幼いあの頃…
私たちはいつも一緒で…
笑いあって、ジャレあって、抱っこしあって眠った…
ずっと一緒にいようねって…
ヒトシくんが大好きだった…
ヒトシくんも私のことを大好きだって言った…
その気持ちは本当だった…

私は小さい頃の私を思い出した…
無邪気に…何も考えず…素直にヒトシくんの胸に飛び込んでいった小さい私を…
幼いミラを自由にしてあげよう…
今だけ…この瞬間だけ…
JINの中の少年のヒトシくんの胸に…素直に飛び込ませてあげよう…

私はJINの腕の中に飛び込んだ。
JINの腕が私を…ミラを…優しく抱きしめた…
私は目をつぶって…感じる…ヒトシくんを…あの頃のヒトシくんを…
ああ…この腕の中が好き…
『ヒトシくんに抱っこされるの大好き』
私の中の幼いミラが言う…
『ずーっと一緒にいようね』
せめて…この瞬間だけは…一緒に…

目を開けると…
シャツの襟元から…あのペンダントが見えた…
私は指でペンダントをなぞって…
顔をあげると…
JINが…JINの中のヒトシくんが…私を見つめていた…
せつない目…何か言いたげな目…

『俺…一生大切にする』
ずっとつけていてくれたのね…
私は思わず微笑んだ…
JINの中のヒトシくんは…愛しげに私を見て…
そして…
そっと私のくちびるに…キス…
『私、一生ヒトシくん以外とキスしない』
『俺もミラだけだから』
幼い約束…
きっと彼のこのくちびるは…他の人のくちびるを知っているのだろう…
そして私のくちびるも…
だけど…私の中の幼いミラと…
彼の中のヒトシくんは…
これが２回目のキス…

だけど…

私はゆっくりとくちびるを離して…
彼の顔を見た…

私の中で…
何かが沸きあがろうとしている…
反射的に押さえ込もうとしている意識の隙間から…
漏れ出してくる思い…
感じたくない…でも…
私は感じてしまった…

私は…

私は…　この人が好き…！
幼いミラとしではなく…　この私として…！
この目の前の人がJINだろうとヒトシくんだろうと…
私はこの人が好き…

自分の感情に愕然とした。

だって、私たちはもうこんなに離れていて…

お互いに違う時間の中を生きてきて…
一緒にいたときよりずっと長い時間を別々に生きてきて…
この人はもう私の知ってるヒトシくんではなくて…
私には一樹さんがいて、一樹さんを愛してるはずで…

なのに…

頭の中の考えが、湧き上がる感情に消されていく。

私はこの人が好き！

強い想いに頭がクラクラした。
脈打つ心臓を思わず手で押さえた。

バカみたい…子どもの頃の小さな恋を…まだ引きずってるっていうの…

頭で否定しても…
私の心は叫んだ。

この人が好き！

彼の目が苦しげに私を見て…そして…
私の手を引っ張って強く抱きしめた。

ああ…私は…この人が好き…
この腕の中が…この人の腕の中が…
幼いミラとしてではなく…今の私で…！
離れたくない…
このままここにいたい！
この人と離れたくない！
ずっと一緒にいたい！

そのとき、スタジオのドアが開いた。
「桐生さん、すみません」
JINのマネージャーが顔を出した。
「今、ジャン・マレンコの事務所から電話があって、すぐ来てくれっていうことなので」

え？

「そうか、わかった」
桐生さんは落ち着いた声で言った。
「それじゃ、これで終わりにするか」

これで…終わり…

私とJINは、思わず顔を見合わせた。

彼の深い青の瞳の中に…私がいた…
ずっとこの中にいたいと思っていたあの頃…
そして…今も…

私たちは見つめあったままで…
JINは私の手をにぎって、ゆっくりと立ち上がった。

この手を離さないで…

けれど…私たちにはわかっていた…
別れのときが来たのだと…
おとなたちの現実に引き離された私たちは…
今、お互いの現実に離されていく…

どちらからともなく…手を離して…

JINはスタジオのドアから出ていった。
逆光の中の黒いシルエットの後姿を見ながら…

『知らずに会うのが早すぎて　知るのが遅すぎた』

私はなぜかジュリエットのセリフを思い浮かべていた。

「吉崎さん！　踊って！」
桐生さんの声が響いた。
「え？」
「ジュリエットの踊りだ！」
こんな気持ちで踊れっていうの？
「ロミオが死んだ悲しみのジュリエットの場面だ」
容赦なく曲が流れてきた。
私は桐生さんを睨みつけた。
わかったわ！　踊るわよ！
この気持ちのままで踊るわ！
私の中には、今、この気持ちしかないんだから！

ロミオが死んだことを嘆き悲しむジュリエットの踊り。
だけど、今の私はジュリエットを演じることなんてできない！
自分の感情でいっぱいで、私でしかいられない！

愛する人を失った悲しみは、怒りにも似て…
二度と会えない人を恋求める気持ちは、憎しみほどに強く…
苦しくて苦しくて苦しくて…
苦しすぎて涙も出ない…
絶望と、それでも消えない愛を求める気持ちで、気が狂いそう…
感じたくない…だけど…押さえられない爆発するような感情…
吐き気がする…
誰か助けて…
だけど…わかってる…
私を…この気持ちを…救ってくれるのは…あの人の腕の中だけ…
けれど…もうそれはない…
失ってしまった…永遠に…
何も感じたくない…何も…
感じないためには…死ぬしかないのね…
自分を殺すしか…
それでもいい…この苦しみから抜け出せるのなら…

私の手は見えない短剣をにぎりしめ…

自分の胸に突き刺した…

もういない…あの人の手を…見えないあの人の手を求めて…
私の手は空を彷徨い…
そして…
息絶えた。

一週間後、マリバレエアートの次の演目が発表された。
「ジゼル」
配役はアルブレヒトが一樹さん、ジゼルは私。
「ジゼル」は、マリバレエアートの代表作のひとつ。
ジゼルを踊るということは、マリバレエアートの看板プリマの座を約束されたと同じ。
だけど…
私は何も感じることができずに、ただボーッと配役表を見ていた。

マリ先生のところに、桐生さんから一本のビデオが送られてきた。
先生に呼ばれて、一樹さんと先生、そして私でそのビデオを見ることになった。

それは…最後に踊ったジュリエットの踊り。
いつ撮ってたの？

「すごいわ」
マリ先生が画面を食い入るように見ながら言った。
「こんなジュリエットが踊れるなんて」

ちがうわ…それは…

「ミラ、すごいぞ！　一皮剥けたなんてもんじゃないよ！　生まれ変わったみたいだ！」
一樹さんも興奮して言った。
「これはぜったい再演すべきだよ！」
「そうね、来年の春にはまたやりましょう、今度は一樹と吉崎さんだけでね」

無理よ…私には踊れない…

だって…これはジュリエットじゃない…私なんだもの…
あのとき、私はジュリエットを演じることなんてできなかった…
私の感情でいっぱいで…
もう二度と…こんなふうには踊れない…
私は、もうジュリエットを演じることはできない！

# ガラスの破片

一ヶ月が過ぎた。

あと２日で「ジゼル」の本公演。
明日は本番さながらの舞台リハーサル。

第二幕のパ・ド・ドゥの練習が終わって更衣室に戻った。
コールドの子たちはまだ着替えていた。
「あ～あ、バカらしいわよねえ」
一人が聞こえよがしに言った。
「誰かさんの引き立て役なんてさ」
「しかたないわよ、マリバレエアートの御曹司つかまえるほど、
　私たちは計算高くなれないもの」
トゲのある声。
「モデルとの写真集なんか出して、タレントにでもなるつもりかしら」
「名前を売るためにはなんだってするんじゃない？」
ヒステリックな笑い声。

羨望、妬み…
今の私には、みんなの方が羨ましい。
舞台中央のポアントの下の、ほんのわずかな空間のために、
そこまで熱い思いを持てるみんなが…
たとえそれが歪んだものだとしても…
今の私には…何もないから…

この一ヶ月、どんなに汗を流しても、何時間も何時間も練習しても、
私の中はカラッポで…
何も感じない…何も…
マリバレエアートの看板プリマとなる公演なのに…
このときを目指して必死にやってきはずなのに…

あと２日で本番なのよ？
あせる気持ちとは裏腹に、私の心の奥はあまりに静かで…
感情が死んでしまったように…

こんなことでどうするの？
私にはあそこしかないのよ？
あの舞台の中央しか…私の居場所はないのよ…

舞台リハーサルの日。
みんな本番と同じように衣装をつける。
午前中は各パートごとのリハーサル。
午後からゲネプロ。
先にコールドの子たちが舞台に向かっていった。

私はゆっくりと着替えて、鏡に向かう。
ジゼルよ、私はジゼル…
そう言い聞かせても、鏡の中の顔は私のままで…
きっと、照明を浴びて、舞台に立てば、きっと、ジゼルになれるわ…

「吉崎さん、あと20分でパ・ド・ドゥのリハに入りまーす」
舞監助手が楽屋のドアから顔を出した。
「はい」
急いでトウシューズを履く。
「痛いっ！」
鋭い痛みが指先に突き刺さる。

なに？

あわててトウシューズを脱ぐと、破れたタイツのつま先から血が滲み出ていた。
シューズを逆さにして振ると、中からガラスの破片が落ちてきた。
なにこれ…
バカみたい、こんな子どもじみたこと…
バカらしくて怒りも湧いてこない…
つま先を見ると、真っ赤な血がみるみる広がっていく。
急いでタイツを脱ぐと、親指の先がザックリ切れていた。
どうしよう…こんな…
しかたないわ…踊るしかないわ…
メンディングテープをグルグル巻いて、新しいタイツに着替えた。
呪われたジゼル…

心が血を流して狂い死にするジゼル…
私はつま先から血を流して死ぬのかしら？
バカみたい、死なないわ、こんなかすり傷じゃ。

大切なつま先をケガしてるのに、私の心は冷め切ったまま…
ため息をついて、楽屋を出た。

忘れてた。
第一幕の村娘の踊りは、ポアントのままずっと踊るんだった。
しかも、左足で…
しかたないわ、私の不注意だったんだから。
そうよ、マリバレエアートに入ってすぐ、私のトゥシューズに画鋲が入っていて、
それから私はトウシューズを履くときは、必ず逆さに振ってから履く習慣がついた。
なのに、今日に限って忘れてたんだわ。
私がいる世界はそういう世界なのに…。

私がいる世界は…そういう世界なの？

「吉崎さん、スタンバイいい？」
客席からマリ先生の声。
「は、はい」
私は舞台の上に踊り出た。

平民に身をやつした貴族アルブレヒトと、そうとは知らず恋をして、
シアワセそうに踊る村娘ジゼル。

微笑みを作るけど、顔が引きつってるのがわかる。
ポアントゥをすると、頭の先まで痛みが走る。
冷や汗が出てくる。
今何を踊っているのかわからなくなってきて…
頭がボーッとして…
「ミラ！」
倒れかかった私を、一樹さんが袖から走って抱きとめてくれた。
「ミラ、どうしたんだ、これは！」
一樹さんが私の左足をつかんで言った。
「血が出てるぞ！」

ボーッと見ると、ピンクのトウシューズの先が血で染まっていた。
一樹さんはそのまま私を抱きかかえて、自分の楽屋へと運んだ。

一樹さんが私のつま先を見ている。
「どうしたんだ？」
「トウシューズの中に…ガラスの破片が…入ってたの…」
「なんだって？」
一樹さんの顔が怒りで真っ赤になった。
「私の不注意だから…」
「なに言ってるんだ！　誰かが故意に入れたに決まってるだろ！」
「いいのよ」
「何がいいんだ！　これじゃ踊れないだろ！」
「踊るわ」
私は無表情に一樹さんの顔を見つめた。
一樹さんは戸惑った顔で私を見た。
「踊るわ…私…ジゼルを踊る…」
「そうか」
一樹さんは私の両肩をつかんだ。
「わかった、今治療してやるよ」
そう言って微笑むと、私のつま先に薬を塗って丁寧にメンディングテープを巻いた。
「俺も爪を割ったことがある、こうしておけばかなり楽なはずだ」
「ありがとう」
「でも、今日はバレエシューズで踊ったほうがいいな」
「そうするわ」
「ミラ、おまえ、本当のプロのバレリーナになったな」
一樹さんが私の目を覗き込んだ。
「ケガをしても踊るって根性、それでこそ俺のパートナーだよ」
そう言って微笑んだ。

ちがうのよ…ちがうの…
今…踊っていないと…自分がどこにいるのか…わからなくなるから…
何もしないでいると…気が狂いそうになるから…
心がカラッポで…何も感じられないから…
私は舞台の上にいるしかないから…

# ジゼル

あと30分で「ジゼル」初日の幕が開く。

私は鏡の前で村娘の格好をした自分を見る。

シアワセなのよ、一幕のジゼルは、アルブレヒトに恋をして、彼を信じて…
なのに…

なぜそんな哀しそうな顔をしているの？

ケガをしたつま先がジンジンするから…
ううん…ちがう…私のジゼルは…心がカラッポだから…
ダメよ、私はあそこに立たなくちゃ。
あの舞台の中央に。
私がいる場所はあそこだけなんだから…。

開幕のベルが鳴る。

私は舞台の袖で出番を待っていた。
一樹さんのアルブレヒトが登場すると拍手が沸き起こった。
自信に満ちた一樹さんの踊り。
この舞台すべてが自分のものとでもいうように…。

いよいよ私の出番。
舞台に踊り出ると、拍手が沸き起こった。
だけど…私は戸惑って…

期待しないで…私に…今の私に…

私のソロが始まる。
私は…ジゼルは…アルブレヒトにお辞儀をして…
踊り始める…恋する乙女の踊りを…
　　心は何も感じないのに…
感じるのは…つま先の痛みだけ…
感じられるものが…これしかないのなら…

感じよう…つま先の焼けつくような痛みを…
私がここにいることを感じられるのは…この痛みでだけだから…

私の居場所は…このポアントのつま先の下の、ほんのわずかな空間だけ…
ここにいることが…こんなに痛い…
こんな痛みを感じて…私はここにしがみついているの？
この小さな空間のために…みんな妬み、他人の足を引っ張り…
そこまでして欲しい場所なの？
こんな危うい小さな空間…
バランスを崩したら、すぐに消えてしまうような小さな空間…
怖い…
ここにいることが…
いつか失ってしまう危うい場所にしがみついていることが…

アルブレヒトが貴族だとわかり、しかも婚約者もいたという事実。
ほら、ジゼルだって、そのシアワセはこんなに危ういものだったのよ。
ジゼルはショックのあまり気が狂っていく…
そうね…狂った方が楽…何も感じなくてすむ…
私は思わず微笑んで…
そして“ジゼル”は死んだ。

暗転の中の大きな拍手。

ちがう世界の出来事のように、私は楽屋に向かった。

第二幕　森の中。

乙女のまま死んだ霊魂ウィリーたち。
森に来た男を踊り狂わせ殺してしまう霊魂たち。
ウィリーの女王ミルタの佐藤さん。
威厳があって、出てきただけで舞台が引き締まる。
コールドの子たちだって、今はウィリーになりきって美しいアンサンブルを見せる。

私だけ…私のままで…

ウィリーとなったジゼルとしてゆっくりと舞台に踊り出た。

ミルタの命令どおりに動くジゼル…
魂のないカラッボの私…

ジゼルの死を悲しんでアルブレヒトがジゼルの墓の前に登場する。

愛する人が自分の死を悲しむ姿を見て、ジゼルは何を思うのだろう。
私は…何も感じない…なにも…
アルブレヒトを殺そうとするミルタに彼の命乞いをするジゼル。
でも…私は何も感じない…
そして、アルブレヒトとのパ・ドドゥが始まった。
アルブレヒトになりきった一樹さんがせつなげに“ジゼル”を見る。
でも…私は…
早く終わりたい…早くこの照明の中から抜け出して…
舞台から降りてしまいたい…
私は…私の心は…
もうここにはいないんだ…
私の心はどこへ…
どこにも…ない…

朝もやの中…
“ジゼル”は消えてゆく…

私が消えてゆく…

津波のように拍手の音が押し寄せる。
頭がズキズキする。
私は操り人形のようにお辞儀をする。

最低だわ。
最低のジゼル…
最低の気分…

最低の私…

初日の次の日の新聞の批評には、

『斬新な新感覚のジゼル！』

私は他人事のように目で字を追った。

『吉崎の第一幕のジゼルは、従来の恋する乙女というより、
　その後の運命を予感させるような憂いを秘めて…』

足が痛かっただけよ。

『第二幕のウィリーとなったジゼルは、まるで空気の中に溶けていきそうなはかなさで、
　それは肉体を持った踊り手を越えた乙女の霊魂そのものだった』

何を見ているの？
そんなものじゃない、最低だったのよ、最低よ！

残りの５日間、私の心は悲鳴をあげていた。
ケガをしたつま先は腫れあがって、もう感覚がなくなっていた。
自分が立っている実感がしない…。
感じられない…何も…。

それでも公演は成功だったらしい。

成功…って、なに？
あんな気持ちで踊って…成功って…なんなの？

千秋楽の打ち上げのパーティー。
みんなの興奮した喧騒に耐えられなくて、私は一人テラスに出ていた。
「主役がこんなところにいちゃダメじゃないか」
一樹さんが笑いながらそばに来た。

「ミラ、やったな」
満足そうな微笑みを…私は、ただボーッと見て…
「一樹さん…一緒に踊っていて…何か…感じなかった…？」
「感じたよ、おまえの踊りは変わった、個人的感情をいっさい感じさせないプロの踊りだ」

ちが…う…私は…ただ…何もなくて…

「いいニュースが二つあるんだ」
「え？」
「ひとつは、１月の世界バレエフェスティバルの日本代表に俺とミラが選ばれた」
嬉しい…はず…なのに…
「世界の超一流のメンバーたちと肩を並べて踊るんだぜ」
一樹さんは興奮して話している。
「俺たちがやるのは青い鳥だ」
「青い…鳥…」

小さい頃…踊ってみたかった青い鳥…

だけど…
私の鳥かごはカラッポで…
私はカラッポで…

「そして、もうひとつは」
一樹さんは、ふざけたように背筋を伸ばして、タキシードのポケットから小さな箱を出した。
「開けてみろよ」
そう言って差し出す箱を、私はゆっくりと開けた。
「え…？」

指輪…
何カラットもありそうな大きなダイヤのまわりに小さなダイヤがいくつもちりばめられていた。

「結婚しよう」
「え？」
「俺とミラは最高のパートナーだ、俺たちなら世界の頂点にだって立てるさ」
「一樹さんは…パートナーが欲しいの…？」
「俺にとって、パートナーイコール結婚相手だよ」
「それじゃ…もし…もしも…私が踊れなくなったら…」

「アハハ、何考えてるんだよ、つま先のこと心配してるのか？
　それだったら、安静にしていれば２、３週間で直るって医者も言ってたろ」
「そう…じゃなくて…もしも…私がバレエをやめたら…」
「え？」
「バレエをやめて…ただの…吉崎ミラになったら…」
一樹さんがフッと笑った。
「おまえがバレエをやめられるわけないよ」
「え？」
「そのバレエを踊るためには理想的な骨格、感受性、小さい頃から骨の髄まで
　染み込んできたバレエの技術、バレエを踊るために生まれたような子だ」

バレエを踊るため…だけ…

「おまえの生きる場所は舞台の上だ、それを捨てられるわけがないよ」

私の…場所は…舞台の上…だけ…

「あの…私…なんだか…混乱して…と…突然で…」
「急がないよ」
一樹さんはそう言って微笑んだ。
「でも、イエス以外の答えは聞かないからな」
私の顔を覗き込んで笑いながらそう言うと、会場の中に入っていった。

パーティーが終わって、私はフラフラになってマンションに戻った。
疲れた…吐き気がする…
安定剤飲んでさっさと寝よう。
郵便受けを見ると、大きな茶封筒が入っている。
デ・ラ・アート出版？
頭がボーッとしてて何も考えられず、私は茶封筒を抱えてエレベーターに乗った。

シャワーを浴びて、安定剤を飲んだら少し落ち着いてきた。

疲れてたんだわ。

リハーサルの日にケガをして、それから６日間の公演…
６日間どうやって踊ったのか憶えてない…
そして…
一樹さんからのプロポーズ。
女にとっていちばん嬉しい瞬間だったはずなのに…
私…何も感じなくて…
疲れてたし…それに…突然で…それに…
それに…

理由が見つからない…

一樹さんと結婚したら、ぜったいにシアワセになれるはずよ。
マリバレエアートの後継者で、世界に通じるプリンシパルで、
あの自信に満ちた態度…
あの人と一緒なら、きっと私も安心して自分の居場所を…

私の場所は…舞台の上…だけ…
あのポアントのつま先の下の小さな空間…
どんなに一樹さんがサポートしても、私が立つのはあの小さな空間…
あそこだけなの？

やめよう、考えたってしかたないわ、疲れてるのに、こんなこと。

ふと、テーブルの上の茶封筒に目が止まった。
デ・ラ・アート出版って…
あ！

封を開けて、中に入っていた本を取り出すと…
JINの大写しになった深い青の瞳の中に踊る私の姿があった。
これは…合成なのかしら…

タイトルは、『MIRAGE IN BLUE』
青い蜃気楼…青の中のはかない夢…

ページをめくると、
JINと私が向かい合って立っていた。
無表情な二人。

最初に撮った写真だわ。
これ使ったのね。

私は苦笑いしながら、次のページをめくった。
「桐生さんの嘘つきぃ！」
私は思わず声に出して言った。
レッスン室で、レオタードで踊る私を、床に座って見ているJIN。
写真集には使わないって言ったくせに！
だったら、もっといいレオタード着ればよかったな。

床の隅で、片ひざを立ててリラックスして座って私を見ているJIN…
その目は…
愛しそうに…私の姿を見ている…
こんな目で見ていたの？

次のページは…
JINが後ろから私を抱きしめていた。
愛しげに…せつなげに…
こんな顔をして…私を抱いていたの…

JINの傷にくちづけする私…
涙で濡れた目で私を見上げているJIN…

JINの腕の中で安心したように目を閉じている私…
愛に溢れた顔で私を抱いているJIN…

くちづけ…
私は…思わず…自分のくちびるに指で触れてみた…
憶えてる…あの感触…まだ…憶えてる…JINのくちびる…

見つめあう二人…
お互いの目の中に…自分の姿を探して…

そして…
これは…別れのときが来て…手をつないだまま…見つめあって…
その手が少しずつ離れていく…見つめあったままで…

こんなところまで撮っていたの？
写真家って…残酷ね…
でも…
写真は…正直で…

逆光に映るJINの後姿…

そして…
踊る私…
私が私で踊っている…
私のままで…私の心のままに…感情を解き放して…

そして…
床に倒れこむ私…

最後のページ…
JINの青い瞳の中で…涙で濡れた瞳の中で…死んでいる私…

私は…
死んだんだわ…
あの青い瞳の中で…
私の心は…あの中にいて…
もう…ここにはない…

私は…永遠に…あの青い瞳の中にいる…

そして…もう…ここにはいない…

踊れないはずよ…
私はいないんだから…
もういないんだから…
どこにも…もう…

あの青い瞳は去ってしまった…
私の心をその中に入れたまま…

残された私は…どこにいけばいいの…

抜け殻の私は…どこにいけばいいの…
私の心は…どこにあるの…

探しに行かなきゃ…
このままでは…生きていけない…
どこにも居場所を見つけられない…
私の心を…探しに行かなきゅ…

でも…
どこへ？
わからない…
だけど…

私は小さなボストンバッグに少しだけ荷物を詰めて部屋を飛び出した。

# レッスン

私は白い建物を見上げていた。

変わってない…
ううん、少し古くなってる。
それに、こんなに小さかったかな。
小学生の私には大きく見えたけど…。
「あさみバレエ教室」の看板は昔のまま。

なんでここに来たんだろう…
なんとなく…
空港に行って…
なんとなく…
昔住んでいたこの町へと向かう最終便に乗った。
もう二度とここへは来ないだろうと思っていたのに…

朝ホテルを出ると、街並みはすっかり変わっていた。
新しいビルが立ち並び、知らない街に来たような気持ちになった。

ここに来たって、何が見つかるわけじゃないのに…
他に行くあてがなかっただけ…
パパの家には一度も行ったことはない…
ニューヨークへは帰国して以来一度も戻ってないし…
ここにだって、もう私の家はないのに…

だから…
なんとなく…小さい頃通っていたこのバレエ教室に来てしまった。
だけど…
やっぱり帰ろう、こんなとこに来たってどうなるわけじゃないもの。

「ミラちゃん？」

振り向くと、あさみ先生がドアから顔を出していた。
「ミラちゃん！　ミラちゃんじゃないの！」
先生はニコニコして走り寄ってきた。
「せ、先生、あの、ご無沙汰してました」

「まあ、大きくなっちゃって！　あら、大きくなったなんておかしいわね」
あさみ先生はそう言って笑った。
「でも、小学校以来ですものね」
「はい」
「今や若手ナンバーワンになっちゃって」
「え…あ…いえ…」
「ねえ、中に入って話しましょう」
「え、あ、はい」
私は数年ぶりに教室のドアをくぐった。

教室の奥のあさみ先生の部屋。
「私ね、もうここには住んでないのよ」
あさみ先生がレモンティーを入れながら言った。
「結婚したのよ、３年前にね、40の花嫁」
先生はそう言って笑った。
「バレエをやってらっしゃる方ですか？」
「ううん、土建屋の社長、再婚の子持ち、結婚した途端に子持ちになったちゃった」
そう言いながらも、あさみ先生はシアワセそうで…
「ほんとは教室もたたもうかと思ったんだけど、まだ生徒たちがいるからね」
そうね…私もあさみ先生に出会わなければバレエをやっていなかった…。
「あなたのロミオとジュリエット、観に行ったのよ」
「え？」
「素晴らしかったわ」
「ありがとう…ございます…」
「残念ながら今回のジゼルは行けなかったわ、コンクールが近くて」
よかった…あんなジゼル…観られたくないもの…
「ねえ、あと30分くらいでコンクールに出る子たちのレッスンがあるのよ、
　よかったら見てやってくれない？」
「え？」
「うちの生徒たち、みんなあなたに憧れてるの、憧れの吉崎ミラさんに
　レッスンしてもらえたら、みんなきっと喜ぶわ」
“憧れの吉崎ミラ”は…カラッポで…
「おねがい、いいでしょ？」
「え…ええ…」
私に何が教えられるというの？　今のこの私に…

教室に入った途端、歓声があがった。
「うわあ！　吉崎ミラだあ！」
「ウッソー！」
「キャー！」
子どもたちが目をキラキラさせて私を見る。

ちがうのよ…私は…みんなが思ってるような…吉崎ミラじゃない…

「ほらほら静かにして！」
あさみ先生が手をパンパンと叩いた。
懐かしい…いつもああやって、騒いでいる私たちを静かにさせていたっけ。
「今日はミラさんがみんなのバリエーションを見てくれるのよ」
「すごーい！」
拍手が沸き起こった。

お願い…期待しないで…今の私に…

「最初はユミちゃんね、他の人たちは各自練習してて」
みんないっせいに教室のあちこちに移動する。
バーについてストレッチする子、鏡の前でピルエットを練習する子…
見慣れた風景…

「ミラちゃん、ユミちゃんは小学５年生」
「よろしくおねがします！」
緊張した顔でペコリと頭を下げた女の子。
「この子はジゼルの第一幕のバリエーションを踊るのよ」
ジゼルの第一幕のバリエーション…村娘の踊り…
「ミラちゃんはそれで優勝したものね」
あさみ先生が微笑む。
遠い昔だわ…今の私には…踊れない…

「それじゃ、まず通して踊ってみて」
私はカセットをかけた。
緊張した顔でスタンバイするユミちゃん。
軸足もしっかりしてるし、甲もちゃんと出てるけど、なんか固いなあ。
私が見てるから緊張してるのかもしれない。

少しリラックスさせないと実力がわからないわ。
「ユミちゃん、ちょっと来て」
私はカセットを止めて、ユミちゃんを手招きした。
ユミちゃんは、不安そうな顔で私のところに走ってきた。
「ねえ、ユミちゃん、ユミちゃんの好きなことってなあに？」
「バレエ」
「え？」

一瞬…
私は…
嫉妬した…
真っ直ぐに…
バレエを好きと言えるユミちゃんに…

「そ、そっか、えっと、そうねえ、それじゃ、好きな男の子いる？」
「え？」
「かっこいいなあとか好きだなあって思ってる子、いない？」
ユミちゃんはチラッと私を見て、
「いる」
小さな声でそう言うと、恥ずかしそうにウフフと笑った。
「その子かっこいいの？」
「うん！　すっごいかっこいい！」
ユミちゃんはニコニコして言った。
「そしたらね、その子のこと考えたり、その子とお話ししたりするとどんな気持ち？」
「んっと…ドキドキしてぇ…ワクワクしてぇ…楽しくてぇ」
「それ！　その気持ちで踊ってみて」
「え？」
「振りを間違えてもいいから、その子とお話してるときの気持ちで踊ってみて」
「はい」
ユミちゃんはニコニコしてスタンバイした。

曲が流れると、ニッコリ笑ったユミちゃんがお辞儀する。
よかった、リラックスしたみたいね。

楽しそうに踊るユミちゃん…
好きな男の子のことを考えて嬉しそうに踊る女の子…
バレエが好きな女の子…

私の中で…
何かが…疼いた…
胸の奥の…何か…

シアワセそうに踊っている女の子が見える…
それは…
鏡に映っていた…小さい私…

『こんなにシアワセなら踊りたくなっちゃうよ』

そうだ…
あの頃…私は…
踊るのが楽しくて…バレエが大好きで…
ヒトシくんのことを考えるとドキドキワクワクして…
毎日が楽しくてシアワセで…

レッスンの帰り道も踊りながら帰った…
踊りたくなると、どこででも踊ってた…
町中が私の舞台になって…

私はシアワセだった…
おとなたちの思惑なんて知らずに…
私の世界はシアワセに満ちていた…

私はシアワセだった…！
私の中にはシアワセだった日々があった…
確実にあった…あれは本当だった…

私にも…この私にも…本当にシアワセな日々があったんだ！

涙で滲む小さな女の子…
忘れていたシアワセな日々…
今…思い出した…
ミラはシアワセだった！

いつからなの？

世界中の不幸を背負った気になって、
バレエにしがみついて、
舞台のあのポアントの先の小さな空間にしがみついて、
忘れていた…
私の中の小さなミラを…！

『私、すっごいシアワセ！』

私の中の…小さなミラが…今…息を吹き返した…！

「ミラ先生、どうしたの？」
泣いている私のそばに、ユミちゃんが心配そうに寄ってきた。
他の子も私のまわりに寄ってきた。
「なんでも…ないの…」
「私、ヘンだった？」
ユミちゃんが不安そうに聞いた。
「ううん…ううん…素敵よ…とっても素敵よ」
ユミちゃんが嬉しそうにニッコリ笑った。

「みんな…忘れないでね…バレエが好きな気持ち…シアワセな気持ちを…」

“小さなミラ”たちが輝く顔でニッコリうなづいた。

# 決心

すべての子のレッスンを終えて、先生の部屋に戻った。

「疲れたでしょ」
あさみ先生はそう言って紅茶を入れてくれた。
「いいえ、楽しかったです」
「ミラちゃんの指導はさすがだったわ、的確にその子の弱いところを見つけて、
　よいところを強調して、みんな終わった頃には活き活きと踊ってたもの」
「あさみ先生もそうでした」
「あら、嬉しいこと言ってくれるわね」
あさみ先生は嬉しそうに微笑んだ。
「こっちにはいつまでいられるの？」
「いえ…決めてないです…」
「でも、そろそろ次の公演の準備があるんじゃないの？」
「え…ええ…」
「次は何に出るの？」
「世界バレエフェスティバル…だそうです…」
「えっ？　すごいじゃない！」

でも…
私の中で…ちがうことが…
さっきまでの私とはちがう思いが…

「あさみ先生…お願いが…あるんです…」
「あら、なあに？」

私はあさみ先生の顔を見た。

次の言葉を言い出す勇気を…ちょうだい…ミラ…

『私は大きくなったらね…』

「先生、私をここの助手に雇ってくれませんか？」
「えっ？」
先生がポカンとした顔で私を見た。
「ここで子どもたちを教えたいんです、子どもたちにバレエを」

「で、で、でも、あなた、マリバレエアートの…」
「やめます」
「えっ!?　だ、だって、あなた、あそこの看板プリマで、今や日本を代表する
　バレリーナで、世界バレエフェスにだって出るような、それを、あなた…」
あさみ先生は動揺して、紅茶のカップをひっくり返してしまった。
「あ、あら、どうしましょう」
先生は青い顔してテーブルの上を拭いた。
「ね、ねえ、ミラちゃん、もう少し冷静になって考えた方がいいわ、
　今日生徒たちを見てもらったのは、べつに助手になってほしかったわけじゃ…」
「わかってます」
「こんな小さな教室の助手になんかなって、せっかく今まで築いてきたものを…」
「先生」
私は、あさみ先生の顔を真っ直ぐに見た。
「私、踊れなくなったんです」
「えっ？」
「踊れないんです、今回のジゼルなんて…悲惨でした…」
「でも、批評では絶賛されていたじゃないの」
「でも、私は踊れないんです」
あさみ先生は何がなんだかわからないという顔で私を見た。
「私は…ここをやめてから…バレエを踊ることが楽しくなくなっていたんです」
「え？」
「ニューヨークでも必死にバレエをやってました。マリバレエアートでも…
　だけど、それは楽しいからじゃなくて、ただ居場所が欲しくて、
　私は舞台中央のポアントの下の小さな空間にしがみついていただけで…」
あさみ先生が黙って私の顔を見ていた。
「でも、さっき、子どもたちを見ていて思い出したんです、私はバレエが好きだった、
　もちろんマリバレエアートでもバレエはできるけど、あそこは私のいたい場所じゃない、
　私は世界の頂点に立ちたかったわけじゃない、私の本当の夢は…」

心が震えて…

「マリバレエアートでも、付属の学校でたまに教えたりもしますけど、
　あそこの子たちは、みんな団員になることを目指していて、世界を目指していて、
　ここの子たちとはちがう、あさみバレエ教室の子たちは、みんなバレエが好きで、
　踊ることが楽しくて、私も小さい頃そうで…
　私はあの子たちといたい、小さい頃の夢をあの子たちと…」
私は涙で濡れる目で顔をあげた。

「思い出したんです…私の小さい頃の夢は…バレエの先生になることだったんです」

あさみ先生が優しい目で微笑んだ。
「それじゃ、ミラちゃんの夢を叶えなくちゃね」

東京へ帰って、身の回りの荷物をまとめた。
父が買ってくれたソファやベッドや高級な家具は置いていこう。

ひさしぶりに父に電話をかけた。
「パパ、このマンションも仕送りも、もういらないわ」
「え？」
「私、パパのお金で贅沢に暮らして、お金の心配なんかしないでバレエを続けることができた」
電話の向こうの父は黙って聞いていた。
「ずっとパパに甘えてたのね、でも、もう一人で歩けるわ、ううん、歩かなきゃ」
「そうか…」
「今までありがとう」
一瞬の沈黙…
そして…
「がんばれよ、ミラ」
涙声の父の言葉を聞いて電話を切った。

マリ先生は、退団届けと私の顔を、信じられないという顔で見ていた。
「あ、あなた、いったい何考えてるの？」
マリ先生は苛立った声で言った。
「これからってときじゃない！　これから世界に羽ばたこうってときに何考えてるのよ！」
「もう決めたんです」
「どうしたの？　何があったの？」
「自分の夢を叶えたいんです」
「夢？　夢ならここにあるでしょ！　世界の頂点に立つバレリーナの地位が、
　バレリーナなら誰でも夢見る地位が、今、まさにあなたの目の前にぶら下がってるのよ！」
「それは私の夢じゃないんです」

「あなたの夢ってなんなのよっ？」
「生まれ育った、私がはじめてバレエを習った教室の先生になることなんです」
「バカじゃないの!?　そんなくだらないことが夢なんて、どうかしたんじゃないの!?」
私は真っ直ぐに顔を上げて言った。
「たとえ人から見たらくだらない夢でも、私には大切な夢なんです」
マリ先生はポカーンと口を開けて私を見ていた。
「今までありがとうございました」
お辞儀をして、マリ先生の部屋を出た。

「本気なのか？」
一樹さんが廊下の隅に私を引っ張っていった。
「本気よ」
「おまえは俺のパートナーじゃないか！　これから結婚だってしようっていうのに！」
「私、一樹さんとは結婚できない」
「え？」
「一樹さんといると安心だった、自信に満ちた一樹さんのそばにいたら安心できると思ってた、
　でも、ちがう、どんなに一樹さんにしがみついたって、私の場所はポアントの先だけ」
「なに言ってるんだ？」
「舞台の中央のポアントの先の、あの小さな空間は誰だって立てる、
　私じゃなくてもいいの、いいえ、私よりあそこにふさわしい人はいくらでもいるわ」
「もっと自信持てよ、おまえは一流のプリマだよ、俺が見込んだんだ」
「私は私でいたいの」
「おまえはおまえじゃないか！」
「一樹さん、私がケガをして、バレリーナとして再起不能になったらどうする？」
「え？」
「それでも私と結婚する？」
「そんなこと…　起こってみなければわからないじゃないか」
「そうね、わからないのよ、だって一樹さんは、何もない吉崎ミラには興味ないんですもの」
一樹さんは黙って私を見た。
「これ、ただの吉崎ミラには豪華すぎて似合わないわ」
私は小さな箱を一樹さんに差し出した。
一樹さんは黙ってそれを受け取ると、背中を向けて去っていった。

翌日、私は旅立った。

ううん、帰るのよ、小さい頃の夢に向かって…！

# 春

教室の窓から見える景色は、もうすっかり春。

ここに来て半年が過ぎようとしていた。

私は以前先生が使っていた教室の奥の部屋に住まわせてもらってる。
助手の給料は安いから助かっちゃう。
「もっと出してあげたいんだけどね」って、あさみ先生は言うけど、
私一人暮らしていくには充分だもの！
それに稽古場に住んでるってことは、いつでも使えるってことだから理想的！

この５ヵ月はあっという間に過ぎていった。
コンクールに付き添っていったり、12月の発表会の準備や本番があって、
何も考えるヒマもないくらいだった。
でも、楽しい。
毎日が充実していた。
ピルエットがうまく回れない子ができるようになったり、
グランジュッテを高く飛べない子がフワッと飛べるようになって、
喜ぶその子たちの顔を見ると、私まで嬉しくなる。
私にもそういうときあったから、その喜びがわかるから。

３月の私の誕生日に、子どもたちがそれぞれカードや折り紙のプレゼントをくれた。
私、感激して泣いちゃったのよね。
「ミラ先生って、レッスンのときは怖いのに泣き虫だよね」
「ほんとほんと！　コンクールで私たちが予選通過しただけで泣いてたもんね」
「だって…ヒック…」
「もう20歳なんだからさあ」
「そうだよ、もうおばさんなんだから！」
「お、おばさんっ？　あんたたち！　今日はギューギューにしごいてやる！」
笑う子どもたち。

シアワセ…　こんな気持ちはひさしぶり。

時計を見ると３時。
もう少しでベビークラスの子たちが来る。
ベビークラスはお母さんたちが付き添ってくるんだけど、
あのレッスン中のおしゃべりだけはなんとかしてくれないかしら。
そういえば…
ママは付き添って来たことってなかったなあ。
幼稚園のときはお手伝いさんがついてきて、小学校になってからは一人で通った。
橋を渡って家から20分のこの教室まで一人で歩いたのよ？
偉いなあ、ミラちゃん！
それだけバレエが好きだったのよね。

ここに戻ってから、橋の向こう側には行ってない。
きっとすごく変わってしまっているんだろう。
私の家ももうないだろうし、小学校も新しく建て直しされたって聞いた。
あの辺りの風景は…あのままにしておきたい…せめて…私の中だけでは…

最初に入ってきたのはトモ子ちゃん。
４月から入った３才児。
「しぇんしぇ、コンニチハ」
「はい、こんにちは」
その後ろから、あれ？　いつものお母さんじゃない…
「すみませーん、今日はこの子の母親が…」
私の顔を見て、ポカンと口開けて、そして、
「あの、もしかして、ミラ…ちゃん？」
「え？」
「私、ゆう子、小学校で同じクラスだった…」
「え？　あっ！　ゆう子ちゃん？」
「うわあ、ミラちゃん！」
ゆう子ちゃんが私の手を取ってピョンピョン跳ねた。
「ゆう子ちゃん、懐かしい！」
私も一緒になってピョンピョン跳ねた。
「いつ帰ってきたの？」
「去年の終わりくらいかな」
「この子がさぁ、ミヤしぇんしぇって言うから、ミラちゃんだとは思わなかったあ」
「もしかして、トモ子ちゃんて…ゆう子ちゃんの子ども？」

「やっだあ！　姉の子よぉ！　今日はお姉ちゃん熱出しちゃったから連れてってくれって」
「なんだそうかぁ」
「私も運悪くちょうど会社が休みだったからさぁ、こき使われちゃって」
「ゆう子ちゃん、今何やってるの？」
「今年短大卒業して、小さな会社のＯＬ」
「そうかあ、ゆう子ちゃんがＯＬかあ」
ゆう子ちゃんとは、イジメの事件以来あまり口を聞かなくなった。
だけど、時が流れて、こうしてまた会うと、そんなことは塵のように消え去って、
懐かしさだけが感じられる。

ベビークラスが終わって、みんなお母さんに連れられて帰っていく。
「今からお姉ちゃんの家の夕飯の買い出しだよぉ」
ゆう子ちゃんはそう言って笑いながらトモ子ちゃんを連れて帰っていった。
みんな、それぞれの道を歩いて、それぞれの暮らしをしている。

あさみ先生は、中学生と高校生のクラスにだけ顔を出すようになった。
「もう全面的にミラちゃんにまかせて引退しちゃおうかしら」
「やだ、先生、まだ早いですよ、私だって教えていただきたいことといっぱいあるんですから」
「あなたに教えることなんてもう何もないわよ」
あさみ先生はそう言って笑うけど、技術だけじゃない、いろんなことを私は先生から学んでる。
子どもたちの心のケアは、私にはまだうまくできない。
教えてるときにぶつかる壁や悩みを聞いてくれるのもあさみ先生。
先生は私にとって、パレエのお母さんみたいな存在なんだわ。

高校生のクラスが終わって、あさみ先生も車で20分の自宅に帰っていく。

教室には私一人。
これからが私のレッスンの時間。
贅沢よね、レッスン室を独占してるのよ。
バーでストレッチをして、次はセンター。
そして…
何か踊ろうかな。
そうね、青い鳥？

一月の世界バレエフェスティバルのテレビ中継。
一樹さんはNCBのキャサリン・クレモントと踊っていた。
彼女のキレのある踊りは、一樹さんの踊りにぴったり合っていた。
きっとあの二人は、これからもパートナーを組むのだろう。

だけど…
私は私の青い鳥を踊ろう。

レッスン室のフロアーいっぱいに私は踊る。
自由に羽ばたく鳥になって…
ポアントの先にしがみついていた私はもういない…
バレエが好きで、踊るのが楽しい、ただのミラがいるだけ…！

然拍手が聞こえた。

驚いて振り向くと、えっと、あ、
「さっちゃんのお母さん？」
「すみません、ピンポン鳴らしたんですけど、返事がないんで入ってきちゃって」
「あ、ごめんなさい、音で聞こえなくて、あの、なにか？」
「うちの子が間違えてナオミちゃんのトウシューズ持って帰ってきちゃって」
さっちゃんのお母さんはトウシューズの入った袋を私に渡した。
「あら、木曜のレッスンのときでよかったのに」
「木曜は部活で遅くなるからお休みするんですよ、ナオミちゃんが困るからって」
「そうですか、わざわざありがとうございます」
「先生、とっても素敵でした」
「え？」
「もうウットリして見ちゃいましたよ」
さっちゃんのお母さんがニッコリ笑った。
「ありがとうございます」
私は心から微笑んだ。

嬉しい、素直に嬉しかった。
あのジゼルで大勢の観客にスタンディングオベーションをもらったときよりずっと。

さっちゃんのお母さんが帰って…
また一人…
公演が終わって、観客がいなくなった舞台の上にいるように…
一瞬淋しさに押しつぶされそうになった。

シャワーでも浴びようかな…。

稽古場の電気を消して、部屋に戻ろうとすると、
ピンポーン

え？　また？

あわてて玄関に走ってドアを開けると、
最初に目に入ったのが汚れたＴシャツ。
履き古したジーバンにゴム長履いた男の人…

だれ？

顔を上げると、少し短めの髪が夜風になびいて、
顔がハッキリと…

青い目が…　私を…

え・・・

えっ？

えーーーーっ？

「JI…JIN…　JINさんっ!?」

ウッソーーーー！

「な、なんでそんな格好して…」
「あ、ご、ごめん、店終わってそのまんま来ちまったから」
「え、あ、や、そ、そうじゃなくて、な、なんでここにーーっ？」

なんか頭が混乱して・・・　なに？　なんで？

「ゆ、夕方、あの、ミ、ミラの…」
JINさんがチラッと私を見た。
「ミラの同級生だったって人が来て」
ゆう子ちゃんだ。
「こ、ここにいるって聞いて…」
「え、あ、そ、そうじゃなくて！　なんでここに？　ミラノにいるんじゃないんですかあっ？」
「い、行かなかった」
「へッ？」

私は一瞬頭が真っ白になって、えっと…

「エッ!?　行かなかったって行かなかったんですかあっ？」
「あ、ああ」
「な、なんでーーっ？」

だ、だって、確か、JINはジャン・マレンコの専属になって、それで…

「ミラノに行く前の晩に…」
JINが下向いて、静かに息を吐いて…
「じっちゃんが死んだんだ」
「えっ？」

おじいさんが…あの優しかったおじいさんが…

「しゃ、社長は、スタッフに任せてミラノに行けっつったんだけど、俺…」
お母さんを…社長と呼ぶ…JINさん…
「じっちゃん置いていくなんて、ぜってえイヤで…」
JINさんの声が震えて…
「じっちゃんの骨は…俺が拾ってやりたかったし…」

私は…震えるくちびるを噛んだけど…

「社長はそのまんまミラノ行っちまって、俺一人で骨拾って、葬式して…」

涙がポロポロと・・・　指て抑えても止まらなくて…

「ミラ？」
JINが顔をあげて私を見た。
「ご、ごめんなさい…私…し…知らなくて…」
JINが淋しそうに微笑んだ。
「じっちゃん死んで、泣いてくれたのは…ミラだけだよ」

私とJINは…見つめあった…
何を話していいのか…わからなくて…

「あ、あの、お、俺さ、今、魚清で働いてんだ」

「えっ？」
「つっても、まだ見習い中なんだけどよ」
JINはそう言ってボリボリと頭を掻いた。
「え、で、でも、モデルは？」
「やめた」
「え…」
「じっちゃん死んで…モデルなんかやってる意味なくなったし…それに…
　死ぬちょっと前に、少しだけ意識が戻って…じっちゃんが言ったんだ…
　最近…おまえの笑う顔見てねえなあって…」

JINの目から…ツーッと涙が…頬を伝って…

「好きな…こと…やって…生きろや…そんで…また…笑う顔見せて…くれ…」

JINは涙を止めようとでもするように上を向いて…ギュッとくちびる噛んで…

私は…
思わず抱きしめたくなって…
でも…

「モデルやめるっつったら」
JINがグイッと涙をぬぐって…
「社長はすんげえ怒って、おまえに買ってやったもんは全部事務所のもんなんだから、
　なんにも渡さねえって、出てくんなら全部置いてけって」
そんな…
「でも、俺、なんもいらねえし、貧乏には慣れてっからよ」
JINはそう言って笑った。
「電車賃くれえはあったから、そのまんまここに来て、魚清の親方に頼んで
　置いてもらうことになったんだ」
JINはそう言ってボリボリ頭を掻いて…
「俺、どうしても魚屋になりたかったから」
そう言って…
真っ直ぐに…私を見た。

「どうしても…魚屋になりたかったんだ」

JINも…昔の夢を…小さい頃の夢を…叶えたのね。

「お、俺さ、こっち来て、ちょっとしてから、一回東京に行ったんだ」
「え？」
「マリバレエアートに行った」
「えっ？」
「でも、ミラはいなくて…どこ行ったのかもわかんねえって言われて…」
そうね…連絡先は言ってなかった…
「そんで、東京中のバレエ団に電話してもいねえって」
え…そこまで…
「そんで、もしかすっと、ニューヨークに行っちまったのかなって」
「ニューヨークには…行ってないわ…」
「うん、でも、俺、そう思っちまって、そんで、これは金貯めてニューヨーク行くっきゃねえなって」
「え？」
「給料安いから、いつんなったら貯まるかわかんねえけど、ぜってえ行くって思ってて…」
「ど…どうして…？」

JINが…私を見つめて…

「約束したから」

「え？」

「お、俺、まだ見習い中だし、給料も安くて、相変わらず貧乏で」

私は…黙って…青い瞳を…

「で、でも、銭湯だけど、今は、あの、毎日風呂入れっから」

青い瞳は…私を…

「だから…　あの…」

真っ直ぐに…私を…

「迎えにきた」

私は…

「ヒ…」

私は…

「ヒ・・・ヒトシ・・・くん・・・」

その名前を・・・

「ヒトシ・・・くん・・・」

あの頃のように・・・

「ヒトシくーーーん！」

ヒトシくんに抱きついた。

あの頃のように・・・

「ヒトシくんの・・・　バカーーーッ！」

泣きながら・・・

「ごめんな…ごめんな…」
ヒトシくんが私を強く抱きしめた。

私はヒトシくんの腕の中で、あの頃みたいに泣きじゃくって…
ヒトシくんは、あの頃と同じように優しく私の頭を撫でて…

見上げると、そこにはあの青い瞳が・・・
優しいまなざしで私を見ていて・・・

「やっと、これた」

私をギュッと抱きしめて・・・

「やっと迎えにこれた」

静かな夜・・・
ふたりだけで・・・
何も言わず・・・
私は・・・
ずっとヒトシくんの腕の中にいた。

# 青の中で **- Mirage in Blue？**　最終話

私たちは結婚した。
「二回目だね」
私がそう言って笑ったら、ヒトシくんも嬉しそうに微笑んだ。

お金がないから結婚式も披露宴もしないつもりだったのに、
あさみ先生がレッスン室を会場にして、生徒のお母さんたちも協力してくれて、
お祝いのパーティーを開いてくれた。
魚清の親方とおかみさんが、お刺身やいろんな魚料理を作ってくれて、
みんながすごく喜んでお祝いしてくれた。

私はあさみ先生が結婚したときに着たっていう白いシンプルなスーツを借りて、
ヒトシくんは、親方が買ってくれた背広を着た。
「男は背広のひとつも持ってねえとな」って、一着買うとズボンが二本ついてくるやつ。

「そういうの着てると、なんかJINみたい！」ってからかうと、
ヒトシくんは、ちょっと困ったように苦笑いして私を見た。

一流ブランド着てるJINより、ずっとずっとかっこいいけどね。

新居は、昔ヒトシくんとおじいさんが住んでいたあの家。
こっちに戻ってきてから、ヒトシくんはまたこの家で暮らしてた。
年月が経って、ますますボロさに磨きがかかってる！
「ご、ごめんな、金貯めて、も少しマシなとこに住めるようにすっからよ」
「私、ここが好き！　小さい頃からここが好きだったもん」
それに・・・
「ヒトシくんが給湯器つけてくれたからもう完璧！」
そう言うとヒトシくんは嬉しそうに微笑んだ。

小さな畳の部屋に、お布団を一組だけ敷いて二人で寝てる。
「ウフフ、小さい頃は余裕だったのに、今はギューギューだね」
「もう一組布団買うか？」

「私はこうしてたいけど、ヒトシくんが窮屈なら…」
「俺は…この方がいい」
ヒトシくんはそう言って私をギュッと抱きしめた。

「ねえ」
私はヒトシくんに抱きしめられながら聞いた。
「どうして撮影のとき、ひとことも口聞いてくれなかったの？」
「それは…」
「ブスッとしちゃって、私と写真撮るのはイヤ〜みたいな顔しちゃって！　フン！」
私はわざと背中を向けた。
「ち、ちがう、ちがうって」
ヒトシくんがあわてて私の身体を引き寄せた。
「あ、あんときは、俺、魚屋になって迎えに行くっつってたのに、あんなことやってて、
　ミラのこと…迎えにも行けねえで、そんで、合わせる顔ねえっつうか、
　どんな顔していいんかわかんなくて、それに…」
「それに？」
「ミラが…　すげえきれいになってて…　ドキドキして…」
「やっだあ！　ヒトシくんたら〜」
私はヒトシくんに抱きついた。

ヒトシくんの匂い…
魚くさくて…汗くさくて…　私の好きなヒトシくんの匂い…

ヒトシくんの青い瞳が私を見つめる…

優しくて…暖かくて…愛がいっぱいの青い瞳…

私は…青い瞳の中の自分の顔を見る…
シアワセそうに微笑むミラの顔を…

シアワセはここにあった…
いつもここにあった…
探していたものは…ずっとここに…
見失っていたときも…
私を待っていてくれた…

私を迎えにきてくれた…

青い瞳…私の居場所…私だけの…

私は眠る…
愛に包まれて…
本当の安らぎと…シアワセの中で…
私は…ずっとこの中で生きていく…
青い瞳の中で…
この深い青の中で…

*FIN.*